特8
739

091218-001-5

特8-739

鼠小僧実記　(今古実録)

栄泉社

上

M18

DBN-2066

鼠小僧實記上卷目錄

○鼠吉兵衛捨子を拾ふ事
　幷幸藏生出の事
○吉兵衛初次郎が助命を願ふ事
　幷鼠小僧上方出立の事
○幸藏倡濱屋女房を計る事
　幷お松密夫を引入る事
○伊勢屋番頭内濟を願む事
　幷幸藏戀慕の念を晴る事
○鼠小僧惡者ゑ付らるゝ事
　幷濟兵衛夜盗の手引をる事
○鼠小僧吉岡村働きの事
　幷伊勢參りと相宿する事
○幸藏金子を奪はるゝ事
　幷幸藏お吉の妄想を夢見る事
○幸藏途中病氣貴家を願む事
　幷孝女を憐む事
○幸藏大坂へ到着の事
　幷近江屋喜左衛門ゲ事
○鼠小僧淀辰お對面の事
　幷淀辰奇術を見する事
○强盜淀辰素性の事
　幷初代淀辰鷹右衛門ゑ殺さるゝ事
○三右衛門幸藏ゑ豪家の手引をる事
　幷鼠小僧織越の家を計る事
○幸藏大金を土中へ埋むる事
　幷三右衛門三ゲ條異見の事
○幸藏次郎吉と改名の事
　幷お先圓覺寺の繁昌を告る事
○三賊十生目村ゑ到る事
　幷三太郎後家物語りの事
○三賊圓覺寺へ忍び入事
　幷住持を生捕事
○鼠小僧天井働きの事
　幷三賊宂熊ゲ金を奪ふ事

鼠小僧實記上卷目錄畢

鼠小僧實記上卷

○鼠吉兵衛捨子を拾ふ事　幷幸藏生出の事

四海の波ゝ靜かして事も渚お鶴龜の千代万代と遊べるを治る浮世とゝ言ふめれども濱の眞砂ゝ盡ぬともと彼譬喩おせし盗人の數も澤有其中お爰ゑ文化年中ゑ鼠小僧と世の中お其名も高き盗賊あり夫ゲ素性を尋るゑ其頃神田豐島町の表長家ゑ住居せし紀伊國屋藤左衛門と云ふ者ゝ元ゝ佐々木家の浪人なりしゲ世渡る道ゑ疎き故次第ゑ零落し果して今ゝ營む業もなく漸々日雇抔をして其日〳〵を送るうち藤左衛門ゝ或日の事女房ゑ向ひ言けるゝ如何成神の祟りゑや今ゝ斯迄零落して三度の食も喰兼る夫婦ゝ前世の宿業と諦めもすべけれ共唯可愛きゝ此幸藏思ひ出せゞ去年の夏産れ出しゝ嬉しくあるも追々續く不仕合せ是ゝち親の手ゑ置て愛目を見せんゝ不便の至り捨子ゝ上の禁制なれど外ゑ仕方もあらざれゞ密ゑ捨るやうゑせん然すれゞ情ある人ゑ直拾ゝれて育てられ却て此子の幸ひとなる事あらんと涙と俱ゑ語り出れゞ女房も同じ貧苦の憂思ひ此先とても情けおや剌み少き痩世帶なまじ我手お袖ふて果ゝ路傍ゑ倒るゝう又淵川へ抔倶々お身を沈めんも不便なれゞと夫の詞ゑ打任せ含ませす乳も痩細る母の面影差覗く兒ゝ捨らるゝと露知ぬ佛心おすや〳〵と眠るをそつと手お渡す女房ゝ此世の別れゝと死別れより彌增る實子ゑ今宵生別れあち悲しやと臥轉ぶ心を察して藤左衛門も共ゑ張裂胸の中いと敢がたく思へども斯てゝ果じと心を鬼ゑし未だうち寒き如月の子ゆゑゑ迷ふ宵闇ゑ人目を包む懷ろゑ稚子抱き行先ゝ夫と當處ゝ無れども居所の羊の歩行して道歩どらで其處此處と捨る場所をゞ尋ねつゝ只ある立派の商人の門へ捨置き其儘お二三間も隔れる家の前なる天水桶ゑ窃お身をゞ隱しながら樣子を伺ひ居たりしゑ兒ゝ肌寒くて聲立れども其家にてゝ氣も付ざりしゲ來ゝる人ゲ目を附て提灯さしつけ進み寄り能く稚子

の顔を見て玉の樣成この男子を捨子とせしゝ能々の仔細有ての事ならんゞ我等ゝ子供の無きてゝ幸ひ天より授け賜しやとうち悦びて拾ひ上げ直懷ろへと抱き入いそ〳〵其場を立去りぬ驛左衛門ゝ其家ゝて拾ひ呉んと思ひの外往來の人ゝ拾はれしゝ最本恋なくゝ思へ共人の拾たる子を拾ふて喜ぶ程の者なれゞ悪くゝせまじと思ふより其後ろ影を伏拜みて我家へこそゝ歸りける扨幸藏を拾ひ上げしゝ豊島町ゝ程近き江川町ゝ住居する吉兵衛と云者ゝして鼠と渾名を呼びなせる博奕打の親分なり其身ゝ人ゝ立られて何不自由も新木なる格子造りの派出搆ひ其座敷ゝゝ大いなる獅咀火鉢ゝ唐金藥罐また勝手ゝゝ惣銅鍋磨き上げたる身上も一六勝負の親分株二階ゝ於てゝ大形ゝ六七人の食客ゞ晝夜を分ぬ悪み遊其全盛ゝ盲ん方なく又吉兵衛の女房も元ゝそれしやの上りゝて姉侍〳〵と立られる鬼の女房ゝ鬼神と言へど拾ひ上たる幸藏をいと可愛ゞりて早速ゝ乳母を抱へて何くれと實子の如く育てしゝ光陰荏苒ゝ押移り早幸藏も十二歳の春を迎ふゝ至りしゞ其頃よりして博奕を見習ひ子分共と一緒ゝなり所々を押廻し歩行ゝつけ性質利口發明ゝて子柄も人ゝ勝れて好く殊ゝ金銀を少しも惜まず湯水の如く蒔散して衆くの人ゝ與へけるゝゞ終ゝ其名も高くなり鼠吉兵衛の子成故鼠幸藏と云ふべきを年も經ぬゝ賢てき故ゝや鼠小僧と呼おせり然る處ゝ鼠小僧も今ゝ次第ゝ奢りを好み廓通ひを始めしより自ゝ金ゝ差支へしゞ或夜一人藏前邊をぶら〳〵徘徊なしたるゝ呉服店ゝや相應ゝ暮す者とも見受らるゝ家の表の戸を明て窃りゝ忍び出る者あり幸藏是と見る處扨ゝ此家の手代ども二人連ゝて吉原へ遊びゝ行のと察せしより跡へ廻て手早くも戸閉りあちぬ門の戸をそつと明て忍び入最大膽ゝも土藏へ這入揭板を上げ穴藏の堅き錠をゞ捻切らんと力ゝ任せて引廻す其物音ゝ此家の主人ゞ目を覺しつゝ起上り土藏へ盗賊這入たり皆々出よと呼はれゞ若者より小僧迄棒ゝ縄ゝと立騒ぐ其混雜を聞付て是ゝゝ大變と幸藏ゝ早くも藏をそつと出て身を中庭ゝ潜め居るゝ家内の者ゝ藏の前へどや〳〵集り來りたれど若や賊めゝ及物でも持てゝ居ぬゝと思ふより左右なく中へ入もせず只口々ゝ留るのみ彼方の店ゝゝ一人ゞ最早居らざる樣子故幸藏店へ忍び行有合せたる賣溜の金を九兩と五六貫の錢を手拭ゝぐる〳〵卷以前の表の戸を明けて難なく外へ出しゆゑ此家の者一人も心付べきやうゝなし是ゞ幸藏ゞ自然と備ゝる盗みの手始めと知れたり

○吉兵衛初次郎ゞ助命を願ふ事
　幷鼠小僧上方出立の事

彼吉兵衛の世話ゝなる食客のその中ゝ初次郎と云ふ者あり元此者の父と云へるゝ福原重左衛門と唱へたる或る諸侯の家中なるゞ鼠吉兵衛ゝ其以前殆んど命ゝ拘はるべき罪をゞ助け救へれたる大恩人の事なれゞ其厚恩を報ゝんと只管思ひ居し折柄其子息なる初次郎ゝ廿一才の若者ゆゑ隨分身持放埒ゝて遊女通ひをなすのみならず猶又武士ゝ有間敷博奕をなして裸体にされ終ゝ殿の俸納戸金七十兩を盗み取欠落せしゞ夫さへも何時の程ゝ遣ひ果し身の置所なき儘ゝ親重左衛門ゞ縁を以て鼠吉兵衛ゝ依頼り厄介と成て隠れ居しゞ或日初次郎ゝ井戸端ゝて水をゞ汲で居る折しも見覚えの有る屋敷の者ゞ四五人通り掛りしゝ早くも此方ゝ目を付て逃隠れしを彼等も亦是ゝ俸尋ねの初次郎ゝ相違有じと思しゝゞ吉兵衛の家へ付入て今此家へ初次郎と云へる若者走入たり彼ゝ少しく用事あれゞ直樣是にて逢ひたしと云へゞ子分ゝ右の由を親分吉兵衛ゝ傳へたるゝ吉兵衛急ぎ出來り貴君方ゝゝ何方より來り給ひて又如何成俸用の筋のある事やと問ふゝ屋敷の者言ふ樣我々ゝ諸侯の探索掛りなるゞ彼初次郎と盲ふ者ゝ去年殿の俸納戸金七十兩を盗み出し其後更に行衛知れず依て殿ゝゝ俸怒り強く容易ならざる事なれゞ我々共ゝ手分して所々を詮鑿せし處今日計らず見付し故是非引立ねゞならぬなり夫ゝ付ても彼ゞ父重左衛門の胸中の其苦しさ

ハ何計りぞ子として親を苦しめる不孝者の初次郎疾出すべしと懷中より捕縄出すゑ吉兵衛ハ不意の事ゆゑ仰天なし先々ヲ待下さるべしと押宥めしが心の中さる罪人とあるうちハ此儘濟す解ゑハ行ず然ハ言へ親ヲ重左衛門殿ゑ大恩受し此身ゆゑ今初次郎を彼等ゑ渡しみす〳〵命を取するハ親ヲゑ對して義理立ずと思案なしつゝ奥へ入り用簞笥より七十兩の金を揃へて取出し是ゑて助命を願ハんと彼役人等の前へ出で其趣きを頼みしゑ夫ハ兎も角其方の最見先初次郎を同道して直ちゑ屋敷へ參るべし就てハ大切の囚人なれバ本縄迄ゑハ及ばずとも手錠を下して連行んと言ハれて吉兵衛も ヲ尤もと初次郎を連來れバ役人達ハ手錠を下し吉兵衛倶々引立て其屋敷へと急ぎ行き大罪人を縛りし由頭役人へ告たるより早速白洲へ呼出ゑなり一應調べの濟し後差添人たる吉兵衛が私し事ハ初次郎を然る罪人とハ心付ず彼是世話を致せし處今日計らぜヲ見出ゑて委細舊惡承まはり誠ゑ驚きヤハ右ゑ付私し儀ハ

初次郎親父重左衛門殿より探て大恩請し者ゆゑ斯る時こそ厚恩を謝しヤ度ハへバ初次郎が盜み取し金子ハ今日私しより上納仕つりハ間何卒犯せし罪の所をヲ宥免あるやう願ひ度く然すれバ重左衛門ハ勿論私しまでも何許りゝ有難き儀ゑ存じますれバヲ聞濟の ヲ慈悲をバ偏ゑ願ひ奉つると泪と俱ゑ願ひけるに此時掛りの役人なる磯中權太夫の言ふやうハ何樣其方のヤ所も何彼と仔細の有事ならん併し等閑ならぬ罪ゆゑ其金子の儀ハ此方が暫く預り置く間右の趣き書面を以て願ふべしと有しゝバ吉兵衛ハ畏まりて委細認め差出すを一瞥讀で權太夫ハ吉兵衛ゑ對ひ其方ハ明日再び呼出すまで私宅へ歸つて相待居れ初次郎事ハヲ法なれバ一先繫ぐべしとの差圖ゑ吉兵衛ハ兎も角もヲ慈悲を願ひ奉つると尙操返して願ひ置き我家へ歸つて其翌日同道人を別ゑ頼み俱々屋敷へ連立てヲ沙汰を待うち白洲へ呼れ重左衛門等諸俱ゑ權太夫より言渡さるゝハ初次郎儀大切なる金子を奪ひ欠落せし段ヲ上を輕んじ且ハ又親の難儀を弁へず忠孝二つの道を欠く事其罪甚だ重くして助命ハ叶ハざるの處折能くもヲ上ゑてヲ法事の在せられ殊ゑ吉兵衛も重左衛門が恩義を謝せんと罷り出で心切成上への願ひ神妙の儀ゑ思し召親重左衛門ハ永のヲ暇又初次郎事ハ門前拂とヲ評議の上のヲ沙汰なり又吉兵衛が差上たる金子ハヲ取上の上不淨金ゑ相成べし右有難くヲ受ヤせと聞て何れも有難くヲ禮ヤ下りけるが吉兵衛ハ道ゑ待受重左衛門等を我家へ連行き彼是厚く世話をしたれど重左衛門ハ初次郎が金子を取逃なせしより格外心痛したるゑや夫等の爲ゑ煩ひ出し逐日病氣の重りしを吉兵衛大ゑ心配して醫師ゑ藥と一方成ず介抱なすゑ初次郎も七十兩の大金を償ひ貰ひし其上ゑ斯許り世話ゑなりけれバ或日吉兵衛ゑ打對ひ親重左衛門も長々の大病なれバ全快ハ覺束なしと思ひし處万事のヲ世話ゑ此頃ハ漸次快氣ゑ赴く容子重ね〳〵のヲ厚恩何の世ゑうハ報ずべきと泪乍らゑ禮を述べ夫より後ハ我と我身の放蕩を悔悟して何時ゑ本心ゑ立返り朝夕親の介抱より吉兵衛の身の事までも万事ゑ氣を付私しゑ く最眞實しく働き居しが重左衛門も年の爲ゑや一時ハ次第ゑ快くなりし病氣も再び重くなりて終ゑ空しく成しゑゞ初次郎の歎き言ん方なく扨有べきゑ非ざれバ形の如くゑ吉兵衛が野邊の送りをなさしめしが扨世の中の幸不幸昨日と替る人の身も替ちざりしハ此方なる吉兵衛が家の賑ひゑて晝夜の分ちも新玉の年立りへる始めより博奕酒食と全盛なる中ゑも拾子幸藏ハ兎角ゑ家ゑ靜居ず所々をバ遊び歩行しが四五日家へ歸らぬ故吉兵衛夫婦ハ狂氣の如く案じ暮して俱々ゑ彼ハ發明の生れなれバ人ゑ欺され遠國へ行くやうな事ハよもあるまじ然れバ天狗抔ゑ攫ハれしゝと此處の占ひ彼處の祈禱と日々の物入大方ならず彼初次郎ハ大恩ある夫婦の心配する事故食事も忘れて晝夜となく所々を廻りて幸藏が行方を尋ね求むれ兵風の便りもあらざれバ斯と夫婦ゑ告たるゑ今ハ詮方泣バりりの歸らめられぬ胸の中を

押沈めて居たりける夫と知らざる幸藏ハ自分一人で育ちし如く思ひ定めて我儘よも先うち先へと遊び居しが或日且ある居酒屋ふて獨り酒汲み居たりしよ相客の者の咄しを聞バ是も博奕打ちしき四五人連ふてありたるが一人の男の言ふ樣ハ何でも今ハ大坂のあの淀辰よやわ勝ふめへ手下も四五十人もあり博奕者の親分ヒやわ世間よ隱れねへ人さが實ハ大盜人と言ふ事で盛數沒吟味ある處を何處をやふして凌ぐゝ知ぬがなゝ〳〵近頃の働き者だと云る噂を聞濟して幸藏獨り思ふ樣遠き昔しの時代でハ熊坂長範石川五右衛門近代よてハ日本駄右衛門又神道德次郎抔末世よ知られし大盜人我も乘懸りし船なれバ假令惡名なりとても名を殘さんと思へ共中々容易よ出來ぬ事就てハ世間の金銀ハ此節兎角不廻りよて金持彌々金を集め貧人次第よ貧しくなり金持三分よ貧人七分の實ふ慘然の世の中なれバ我ハ是より力を盡して世よ無慈悲なる富人の金を奪つて一面よ貧しき人よ蒔散し安樂世界よして遣らん然すれバ我名も世よ知られん去れども斯云ふ大仕事ハ後猶なくてハ成就せまじ幸ひ今聞淀辰を頼んで望を果せし上生涯榮曜よ暮さんと大膽至極ふ志ざし其居酒屋を立出つ懷中ふある僅の金にてそこ〳〵旅の用意をなし路用ハ道ふて拵んと出掛ハせしゲ心の中我願ひとハ百ひ乍ら斯我儘よ旅立おさバ無禹親が案じられんと思ひ出して此方を振向き頓て歸つてお詫ヤせバ赦させ給へと伏拜み流石不敵の幸藏も親の情よ後髮引るゝ心を勵して足を早めて行程よ早芝田町一丁目の角の處へ差りゝりぬ

○幸藏信濃屋女房を割る事
　幷お松密夫を引入る事

扨も鼠幸藏ハ今田町迄來りゝりしふ向ふの方より來りたるハ廿五六の中年增上者の小袖ハ結城縞よ黑七子の通し半襟下着ハ小紋縮緬にて厚板の帶を和はり緋微醉機嫌の姿んのりと櫻色なる其眼元の仇成姿よ幸藏ハ生れ付ての女好き故一目見るより見惚つゝ思ハず跡を付て行しよ或裏店へ這入たり此方ハ側りの水茶屋へ腰を掛て休み乍ら若姉さん今此所を通て行た仇ふ女ハ何れ近所で評判だらふと餘所乍ふ尋ねしふ茶屋の女ハ打微笑貴方も沒氣ゲ有ますかと云れて幸藏笑ひなゲら氣ハなきよしも非ず夫だゲほんの眼の正月お庭の櫻で詮方なし併しあれハ圍ひ者ゥ但しハ人の女房ゥと再び問バ女の言ふ樣今のハお松さんと言ふ亭主持でハございますゲ此節ハ沒亭主の信濃屋藤助さんハ毎歲の通り糸反物類と上州へ仕入よ沒出ふすつたので只一人ふて沒留主中と問ぬ事迄語るをバ幸藏聞て思案なし腰より矢立を取出し用意の紙へさら〳〵と手紙の樣成ものを認め懷中なして茶代を置き大きよ厄介と其處を立出夫より沒殿山又ハ泉岳寺抔漫ろ歩行して日を暮し漸々入相の鐘を聞て先よ見世ゥ置し裏屋へ這入彼女の家を尋ね格子戸を明て内へ這入田舍詞の作り聲ハイ些沒頼みヤますと言へバ女房お松ゲ立出何處ゥち沒出なされましたと言ふよ幸藏會釋して藤助樣の沒宅ハ此方ゥ私しハ上州より參つた者委細の事ハ此手紙よと以前の手紙を差出せバお松ハ取て押戴き是ハ〳〵沒世話樣マア此方へ沒懸遊バせと煙草の火抔愛想よ出して尙も挨拶しなゲら手紙を見るよ上書ふハ江戸芝田町信濃屋藤助宅とあり封を押切讀下せバ

一筆ヤ入ハ此沒方ハ年々上州へ參る御商賣物の仕入よ付沒世話よ相成る沒方ふハ其上逗留中ハ沒家内方も沒深切よ沒世話下されハ處今度江戸へ沒用向ふて沒出成れハ僅何卒〳〵我等ふ替りて沒禮ヤ上べく定めし一日ゥ二日の沒逗留ふ可有之さもれバ旅籠屋へ沒出も贅成故我等方へ沒宿ヤ沒馳走なさるべく猶我等事ハ指を痛めハまゝ代筆を頼みヤ送りハ與々も沒頼みヤ入ハ〳〵

お松どの

と認め有故ふ松ハ少しも疑ハず幸藏ふ向ひ扨ハ夫藤助よりの手紙よて委敷承知致しましたゲ毎度宿よて沒世話さ

まゝ成ますとの事ゝ、何卒ゐ上り遊べも樣と始めゝ替る愛想ゐ幸藏ゝ仕濟したりと心の中ゝゝ悦べゞ夫とゝ言ゞ辭儀をして否是より馬喰町へ參つて宿をとりますと言ふをゐ松ゝ無理ゝ押止め左樣ゝてゝ私しゞ跡で夫ゐ呵られます故兎も角貴方一夜成とも何卒ゐ泊り下されませ嘸ゐ草臥でござんせう何ゐ遠慮ゝゝ及びません先洗湯へ行しつてと日和下駄拵貸與ふるゝ幸藏ゝ草鞋を脱ぎ折角のゐ深切左樣ならゐ厄介ゝ成ませうと風呂敷包をゐ松ゐ預けて洗湯へ行けべゐ松ゝ酒肴の支度をなし歸りを待ゐ程もなく幸藏ゞ立歸りて座敷へ通れべ此方のゐ松ゝ膳を拵らへ差出して今日ゝ憎生時化ゝてゐ口ゝ叶ふ物ゝなけれゞ先ゐ一ッと差出す猪口を幸藏受戴き尙叮嚀ゝ曾釋して手土産さへも持參らぬゝ斯樣の事ゝてゝ恐れ入る決して御辭ひ下さるなと言つゝ受し盃盞の酌ゝ見初しゐ松ゞ手元良を肴ゐ心嬉しく相を頼めべ此ゐ松も少しゝ飲る樣子故是でゝ[illegible]ひも叶ゝんと程を計りて猪口を納め飯もゐ松ゝ盛せつゝ十分ゐ腹を拵らへし後ゐ松ゞ二階へ床をのべサア御休み遊ばせと烟草盆拵持上るゐ幸藏ゝ仕事ゝ夜中と心の中然樣なれべゐ先へと二階へ上つて床ゐ臥しゞ此二階の眞中ゐ明り取にや三尺四方の格子あるゐゞ是究竟と此窓より密と下を差覗けべゐ松ゝ邊りを取片付其處へ自分の床をのべて悠々烟草を薦し居しゞ遙ゐ屏風を立廻して獨り寢いりし樣子なり幸藏これを見濟して暫らく考へ居る折柄早二更とも覺しき頃入口のほを剝喙〳〵と窃りゐ叩く曲者あり幸藏聞て怪しみ乍ら又も格子より差覗けべゐ松ゝ無言ゐてそつと起出門の戸を明ると頭巾ゐて良ゝ定りゝ見えね其年ゝ十八九位の艶男入來るをゐ松ゝ手をとり屏風の中へ引入なゞら二階の方へ指ざしするゝ泊り客の有事を知らぬる故と知れたり斯て二人ゝ床の中果敢なき夢を結ぶ樣を見る幸藏ゝ心の中此奴密夫と察せし故二階をそつと忍び下り妙をべ得たる手練ゝて門の戸明て表へ出彼奴の歸りを待とゝ知ぬ二人ゝ又の逢瀬を約し送り送らるゝ懇中ゐ人目あらじと門の戸明け呑打叩くゐ松よりゝ彼若者ゝ有頂天心も空ゝ跟蹌足元うろれなゞらも踏しめていそ〳〵として歸り行

○伊勢屋の番頭內濟を賴む事
幷幸藏戀慕の念を晴る事

斯て幸藏ゝ若者の跡をべ附て行たるゐ芝七曲りなる土藏造りの米屋の門口打叩けべ內より夫と潛り戸を明るを待受け若者ゝ直と奥へと通りたり幸藏續いて這入や否や大聲揚て吐鳴やうサア信濃屋の間男を慥ゝ見屆けた上ゝらゝ直〻家主へ懇合て上へ廻ゝと聞よりも年頃六十許りなる喜助と云る番頭ゞ忙て其處へ走出し先々靜ゝ賴みます斯夜更ゐ何事ゐやと言ゝ幸藏猶聲高く夜ゞ更やうとも明けやうとも那信濃屋の亭主の留守へ忍び込だ密夫ゝこの家の亭主ゝ息子ゝ知らぬゞ斯見付し上ゝ表向と言ふを喜助ゝ押宥め先々靜ゝして下され能ゐ咄しを聞し上何樣とも御相談致します私し事ゝ此家の番頭喜助と申者なるゞ知るゝ通り此家も世間ゝ知られし米伊勢屋其樣嘶しゞ發としてゝ實も蓋もない不評判さて其方樣ゝ信濃屋の御亭主なるゝと問ゝけるを幸藏ゝ頭を振り私ゝ信濃屋藤助殿ゐ餘儀ゐく賴まれて上州より態々今度來りし者其仔細と云ゝ外ならず藤助殿ゝ上州へ商ひ物の仕入ゐて此節留守の事なるゞ親類中の何某より手紙を送つて知せたゝ留守中家內のゐ松どのゝ不取締の樣子故早々歸て始末を付よと捨假難き事なれゞ肝心要めの仕入物ゞ未だ極りも付ぬゝ居れべ中途ゝ歸る歸ゝゝ行ず依て取敢ず私を賴み先々家の樣子を見屆けいよ〳〵ゐ松ゞ男狂ひとして居るやうな事あらべ相手ゝ家主へ預け慎きゐ松ゝ一先里へ歸して萬事私ゞ歸る迄留守して呉よと賴れしも兄弟分の好身故と請合て此地ゝ來り昨夜彼家へ泊つて居て見聞ゝしたる密夫も此咏のある米伊勢屋相手ゝ取て面白いサア是うら家主へ男の預りとりゐ行ぞと出んとするを番頭喜助袖を捕へて幸藏を種々樣々ゝ宥めつゝ心の中ゝ思案するやう

扨々不計事こそ起れり若表向ゐなる時ハ其當人の若旦那又親旦那ハ言もさちなり此番頭の喜助迄ゞ實ヨ世間の物笑ひ兎角内濟より外なしと眞樣帳場の引出より金子五十兩取出し段々とのゐ咄しを聞まして面目もなき此仕合若此事ゞ表向と成上ハゐ當人の勘當とも成べき騷ぎ故其處を貴方ゞ呑込で丸く納めて下されよ是ハ私しゞ心許りの進せもの酒肴飲で何分ゐも浮亭主さんへハ内々ヨと只管頼むを押戻して是番頭さんゐ前計り只宜樣ヨ言ひなさるゞ左樣ハ行ぬと云ふ仔細ハ今此事と私しゞ穩便ヨ濟したとて後日ヨ至つて顯れた時ハ私も兄弟分の好身を欠き又商ひ先となくずと言もの夫ゃ是やを思ふヨ付け此相談ハゐ斷りとそげなく言れて番頭ハ成程夫も浮尤も併し斯云ふ事柄の世間ゐないと言ふでもなし又表向顯れても首代七兩二分出せゞ内濟ヨなる事なるゞ何分世間の評判を厭て頼むゐ相談と言ふ折奥の方ヨ當り是喜助さん〳〵と呼ぶ聲聞て番頭喜助ハ暫く待て下されと奥へゞ立て行

わける跡ゐ幸藏心の中扨ハ息子ゞ呼しならん密夫代も直段ゞ増んと嘲笑つゝ待て居る中喜助再び出來り是ハ〳〵ゐ待遠でござりました扨只今の一件も段々と夜も更ゐ前さんも旅のゐ方手間を取てハゐ迷惑とゐ察しヤして此金子百兩差上申しますれゞ是で何卒能樣ヨ内濟の事を頼みます夫とも其方で何有ても不承知ならゞ是非ゞない望みの通り家主より預りでも何でも出させませうゞ夫でハ餘り詮ゞなく殊更互ひゐ不評判を求める譯でハありませんと云れて幸藏仕濟たと歡び段々とのゐ譯合番頭樣のゐ心盡しで折角出されし其百兩私ゞ確りに請合ましたと百兩の金を懷中して左樣なら番頭樣今迄の事ハ是切ゐと其家を出て又再びゝの裏家へと立歸り入口の戸を剱幕〳〵叩けゞ寐て居しゐ松ハ目と覺し又米伊勢屋の息子ゞ來しゝと暖嗽ゞちひして例の如く入口の戸をそつと明れゞ豈計らんや作夜泊りし上州客ヨてありしゐどチャ〳〵二階ヨゐ出と思ひの外今頃外ゝら浮歸りありしハ是や何の間

ヨ出られしと惘れしゐ松ゞ樣子を見て幸藏ハ笑ひつゝ其所へ嘲かと安座をゝき何の間なぞとハゐ内室樣夫りやあゐ前の事でせう此門口を叩くのハ米伊勢屋の若旦那より外ヨハ決して有まいと平常ヨ極た譯ゝハ知らぬゞエヘン〳〵の咳拂ひの合圖で明て貰ふのゞ私も誠ヨ恐しくなり一寸叩いて見たのさと云れてゐ松ハ仰天し若此事ゞ上州の夫ヨ知れなゞ一大事と胸轟いて躰向を幸藏ハ脊中を叩き浮内室樣那程の浮樂みゞ有乍ら今更何の初心らしく嘲で居る事ゞ有ものゝね此私迚も木や石で拵へたと云ふ譯でハなし是ハ斯だと浮咄しなら其處ハ譬ヨ云ふ通り魚心あれゞ水心さ上州ハ居なさる藤助樣も實ハゐ前の顔形の美しいのヨ心配して江戸へ行なら外へ泊らず私の家へ寄て樣子ゐ氣を付け若男狂ひでもして居るなら先の男の家を見定め女房ハ里へ一先返し跡ハゐ前ゞ留主をして私の歸る迄待て呉よと夫ハ〳〵くれ〳〵ゐ頼みまだ〳〵外ゐ種々と話し合た事も有ますゞ其方とても一人寐の淋しき

儘の色狂ひも深みへはまらぬ其中わ心を改め翌日うら堅く留主を成るゞい、其所で米屋の色男も今私ゞ能懇合て再び此家へ來ぬ樣ゝ固く約束して來ました夫わ付てハお内室さん其方ハ何と思ふゝ知らぬ〻私の身わも成て見なさい那二階の格子うら床の中での淫樂みを兼々見て居た心持それを是うら此夜更ゝ又も二階へ上り込で獨りで寢られる物でせうゝ否でも有ふゞ夜明迄其方と一所ゝ寢かして下さい其所ゞ魚心あれバ水心で藤助樣への話向ハ私ゞ歸つて何とでも其方ゞ歸りを待詫て心うら苦勞をして居るとゝ何とゝ彼とゝ嘘で丸めて甘く安心させるのハ是此私ゞ腕一ッとお松の手を取引寄れバ此方も少し安堵して氣を揉む事も長煙管烟草吸付差出し今と成てハ其方樣へも何だゝ誠ゝお恥しく何卒今宵の一條ハと口數利ず流し目わ見やる眼元ゝ幸藏ハ心の中ゝ此烟草ゞ三々九度の盃盞ならんと押戴いて吸終りお松の床へ轉ゞれバ否應なしゝ引廻す屏風の中の睦言夫を重ねる小夜衣筑摩の鍋の尻癖早き淫婦ゞ馳走の居膳を幸藏素よりお辭義なしわ其取箸も聽太き己れゞ無質の盜喰淺間しゝうし事共なり

○鼠小僧惡者ゝ付らるゝ事

并清兵衛夜盜の手引する事

扨も鼠幸藏ハ計らず途中で見初たる女と枕を替せしより其煩惱の思ひを晴し翌日出立なさんとせしゝお松ハ猶も密夫の事と隱し貸ハんと思ふより金十兩を差出し餞別なりと送るゝゝ幸藏ハ牡丹餅で頬游叩く心地して此處わ名殘ハ惜けれど氣を取直してお松ゝ對ひ藤助さんへハ私の腹で宜なゝ計らひ置ませうと安心させて立出つゝ辭らず大坂への路用も出來先宜つたと獨う歡び前夜の事など思ひ出して笑ひながらわ六鄕の渡しを越て川崎の宿を打過行きたるわ我行跡より壁を揚て若旦那〳〵いやはや誠ゝお久し振是うら何處へ浮出なさると言はれて幸藏振返り兼々見るゝ其狀ハ小さき風呂敷包みを脊負股引草鞋ゝ半合羽で旅刀を差込だ一向見知らぬ男故不審いとハ思ひ乍ら也大方親仁吉兵衛ゞ博奕仲間の者ならんと思へバ程宜く調子を合せ實ハ私しも思ひ立て伊勢へ扳參りをする旅なれバ決して親父へ沙汰なしゝと言ふのを聞て彼男ゞ夫ハ素より承知〳〵私も幸ひ名古屋迄用向有て行歸ゆゑ夫なら一所ゝ參りませうと言へるハ何だゝ怪な事と胸ゝ當りし幸藏ゞ此奴の貞を倩々見るわ一癖あるべき面つきゆゑ一番此奴をお先ゝ遣て一働きとせんものと空さず咄をし乍ら行わ此男も心の中ゝ此野郎ハ高の知れた賣飯位の代呂物と蔑視なゞら言ふ樣ハ最う若旦那晝飯ハ如何でせうと勸むるゝ打点頭て幸藏ハさうさ時分も宜らうと神奈川驛の或茶屋を見立て二人其處へ這入れバ茶屋の女ゞ三四人何れも江戸の者と見え愛想を能く應ゝ二人ハ直樣足を洗ひ俱々奥の座敷へ通り女を相手に酒肴を十分出させて酒宴をなも中彼男の言ふやうハ若旦那ハ此道を存じわるゝ知ませんゞ是うら先ハ程ゞ谷で夫より戸塚の宿までハ凡そ二里餘もありませうゞ此戸塚の宿と言ふハ昔し盜人數多有て處々方々へ押込だり又ハ旅人を惱して益々亂暴してゐた處爰わ不思議な事の有たハ彼盜人等ゞ或家の夫婦を慘虐ゝ打殺して金銀衣類を盜み取とサア其夜うら往來へ二人の靈魂顯れ出て往人毎わ泣叫び恨みを返して下されと悲しい聲で賣む處或夜一人の武士ゞ通りゲ、つて幽靈ゝ逐一仔細を聞たより其盜人の吟味嚴しく終ゝ十人召捕れて直磔ゝ架られたを所の者ハ祟りを恐れて十の塚を立たのゆゑ實ハ十塚と言ふべきを今ハ戸塚と書とう云ふ故事來歷ハ斯の通りと知たり良ゝ話しかけるを時の興とて幸藏ゞ然言譯うと云ひつゝも元より好む酒故ゝ茶屋の女ゝ戯れ乍ら倘彼男と献つ酬つ頻りゝ飲で居る中ゝ此方ハ十分飲食ゝ腹を滿へた事なれバ時分ハ宜と立上り鳥渡手水をして來樣と庭口差て出うけるを見て取る幸藏跡より續ひて私も行て來ませうと立れて此方ハ南無三寶といつハ一番間ゞ扳たと素知ぬ振わて小用を辭せ座敷へ歸れバ幸藏も矢張元の座ゝ着きて又も酒酌持す

中微笑ながら幸藏が一体其方の名は何と云あさるやと尋ねれば私しは清兵衛と申まを而して彼前樣はと問ふ幸藏は心の中扨は此奴は親吉兵衛の近付でも何でもあく全く此方が旅馴ぬ風躰を見て付込だ彼道中の騙子りよし〳〵然云ふ譯ならば其膽魂を抜て呉んと胸を定めて懐中より小判を一枚取り出し清兵衛さん是は餘り少しだが道中の草鞋錢よでもおしなせへ夫うら女中を呼で呉なと清兵衛は三四人の女中を呼せて幸藏が大きよ彼世話よ成ました〻ア一ッ宛飲れへな者は是だと二分金を女よ一ッ宛渡せば愛想初めよ百倍して悦ぶ樣子よ清兵衛は大よ膽を潰しつゝはんの壹飯位の稼と思つてゐたゐ此有樣是はとんだ大目違ひ併し斯言う目違ひは幾許有ても障りなしと心の中よ思ひながらも彼小判を押戻して彼志ざしは有難ひが彼前さんも彼伊勢樣へ抜參りとの事なれば路用も多く入事でせうまづ〳〵是はお納めなさへりの譽よも江戸子の登り大名下り乞食と云た通りの理合で其行懸は有丈の金を殘らず者り散し歸りは柄杓一本で報謝を乞ひつゝ漸々ゐ江戸へ着のが問々ある習ひと深切ごりしの姿辭儀を夫と知れ其幸藏は態と恐りし面地して一兩位じや不足と言ふのゝ夫なら十が廿でも欲くば隨分遣りもしやうと邊りを處々見廻して女共の今は居らぬを是幸ひと聲を密め己と一所ゐ心を合せ此海道の分限者へ是うら手引する事なら其方が一生安樂よ暮せる程よ盗んで遣ふと言ふよ清兵衛は悩れ果しが同じく聲を密めつゝ夫じやあ彼前も己が仲間の騙子りと笑つて問へば幸藏大いよ嘲笑ひ夫なけちな者じやあねへ併し騙子位ゐは碌な手引は出來めへと言れて清兵衛小膝を進め左樣侮つた者でないと云ふは我等の仲間中で日頃どうゝと付況へも用心能故手出はせぬが處は三州の田舍でも吉岡村の新田の太郎左衛門と言ふ大百姓は凡そ四五万兩程の大した分限と云ふ咄し何と是より其家へ行ては如何と勸める詞よ幸藏大よ打悦び能々是うら直に行かふ夫じやあ案内して呉と身支度をするを清兵衛は兵衛はまあ〳〵鳥渡彼待ちなさへ私の手下の文吉はとんだ雜轉の利た奴故彼奴を一諸よ連て行ば隨分益よならふと思へば暫の間と立出しが間もなく同道して來り先幸藏へ初對面の挨拶させて密事を告るゐ去ば行んと幸藏は其處の酒食の代を拂ひ三人連立道中の路用は幸藏が賄ひゐて晝夜者りを極めつゝ三州路へと赴きぬ

○鼠小僧吉岡村働きの事

并伊勢參りと相宿する事

偖騙子清兵衛とは文吉が案内よ任せ鼠幸藏は日を重ねて三州岡崎へ到りしよ扨清兵衛が言ふ樣は彼吉岡村と云ふは是うら乾の方よ當れば其方角へ行ませうと先へ立つゝ在へ道入道程三里許りも行て爰だ〳〵と言ふゆゑよ幸藏其處よ立止り太郎左衛門が家の樣子を窺と見定め二人よ向ひ一先岡崎へ戻らんと元の道へ立歸り或旅籠屋ゐ宿を求め湯抔へ入りて打寛ぎ酒酌乍ら幸藏は二人よ對つて聲を密め彼前達は何程の金銀を捕る了簡だと言へば二人は口を揃へ夫は欲よ限りは無れど先持る丈けは千兩でも又二千兩でも欲いものと言ふを幸藏點頭て夫なら細引の用意とせんと先ゐ此家へ來る時覺え居る故文吉ゐ直差圖して求めさせ時刻を計つて宿の亭主よ私し共は用事が有て何某方へ行ますうら少しの間此荷物を預つてゐて下さいと頼で置て三人連立彼吉岡村へ出行しが太郎左衛門の方へ行きしは木戸も眠る丑滿頃ゆゑ時分は宜と幸藏は樣子を伺ひ先達て黒板塀を乘越つゝ文庫藏の方へと廻り竹階子を尋ね來り藏の窓へ掛るや否や自然備とる幸藏が猿猴の梢を傳ふ如く忽ち上へ駈上り窓の筋金を二三本手早く折て土戸を明け二人を招きて安々と藏の二階へ忍び入幸藏は早くも懐中より摺火打を探り出し用意の蠟燭へ火を移して藏の下へ至り見るよ座敷めきたる處あり其處の襖を開き見れば何十と云ふ金箱が積重ね有よ幸藏は悦び彼細引よて二千兩を先清兵衛が脊中へ脊負はせ又文吉が脊中へも二千兩を脊負せて己れは其處よ出てゐたる三百兩餘

を胴巻へ入て聢と体へ結付け蠟燭の火を吹消て元の窓より忍び出竹階子を下りて二人を待ゐ二人ハ何分重さハ重し且金箱が窓へ支へて自由を得ざる處より清兵衛ハ首と出してハ引込み又文吉も首も出してハ引込みする故幸藏ハ是を見て偖ハ金箱の支へるので重みヨ堪兼居るならんと早くも察して小聲ヨて荷を輕くして下て來と言ゞ彼方の両人いみす〳〵大金を捨行ハ殘り惜いと思ふより遁れ出んと種々ヨ心を碎いて居る折柄兼て非常の夜廻りが見付出せしものなるゥ人聲聞へて提灯の火影が近く見えたるヨ幸藏焦つて両人が顔を出モ度手間似で知せ早く出よと氣を揉めゞ二人ハ一向埒明ず尙ぐづ〳〵として居るヨ最う詮なしと板塀を乗越んとする折柄忽然耳ヨ音高く売貝の聲聞ゆるゐ流石の幸藏膽を潰し漸やく塀を乗越て内の様子を伺へゞ早竹階子の直下へも火の影ちら〳〵見ゆるのみゥ村中の者四方より集り來る様子故今ハ二人を助ける處ゥ此儘此所ヨ居る時ハ俱ヨ自滅と思ひしより獨り其場を逃出せしゥ追々売貝を目當ヨして竹鎗抔を携へたる百姓共ゥ太郎左衛門の家へと寄來る有様ヨ見付られじと幸藏ハ稻叢の中へ身を隠し様子如何ヨと伺ひ居るヨ大概二百人計り太郎左衛門ゥ方へ行しに驚きながらも幸藏ハ先己だけハ安心したと獨り事を言ふ間もなく又十四五人其前を通り乍ら言やうハ彼売貝ハ盗人だらふ何ヨせよ行懸ゐ此稻村を竹鎗で彼方此方と突通さゞ若逃出した盗賊ゥ隠れて居るも知れねへと咄し合のを聞く幸藏驚の下より汗を流し漸々其所を逃出して本街道へ出たれゞ宵ヨ宿りし旅宿屋へ今更寄るのも間抜な咄し儘の荷物ハ置土産と一人心ゐ點頭つゝ矢矧の橋を左りゐ見て池鯉鮒の驛に差懸り彼二村山の古歌の如く玉くしげ二村山の白々と明行末ハ波路成けりと云るヨ似たる幸藏ゥ此邊りヨて夜を明し彼清兵衛と文吉の末ハ波路と成果しやと流石ゐこれを不便ヨ思ひ並木を越て漸々ヨ間の驛へと辿り着き朝の支度をせんものと或る茶屋へ入り酒を飲みやう〳〵心も落付たと獨り心ゐ悦ぶ折此家の店の門口ゐ雲助共ゥ二三人寄集つて高聲ゐいやハや夕部の騒動で寐なりつた故ゥ眼ゥ澁いと咄すを聞て此家の亭主ゥ其騒動とハ如何云ふ譯と言へゞ雲助差寄てお前さんも知ての通り吉岡村の大身の太郎左衛門様へ盗人ゥ三人這入込さ處其中二人ハ召捕たゥ一人ハ何所へ逃たので四方八方の出口〳〵へ手と廻しての厳しい詮議と語るヨ亭主ハ打驚き那用心堅固の浮宅へまんまと忍び込むと云ハ就れ中々の盗人だらうゥ其逃たと云ふ一人の奴ヨ金でも奪れた譯ゥなと聞ゞ雲助笑ひながら何でも欲ハゥけれへもので跡ヨ殘つて捕つた二人の奴ハ強欲で二千兩宛脊負た故藏の窓ゥら出損つて如何する事も出來なゥつたゥ逃た一人の盗人ハ三百兩餘を持て出たとゥ殊ゐ跡で調べた處二人ハ逃て行た奴とハ素より知た中でハなく唯道中ゥち欺されて連られて來た者だと云ふ事何ゐ成ても利口な者ハ違つたものだと其主の其處ヨ居るとハ知らずして猶種々とする噂を側ゐ聞居る幸藏ハ飲酒さへも味くねへと思ふ折柄雲助等ゥ問屋をさして行しゆゑ早々其處を立出つ足ヨ任せて歩む中辭田の宮も打過けるゥ何分獨り物淋しく咄し相手のあれゥしと心懸つゝ行折柄年頃廿七八の穩ならしき伊勢參ゥ跡ゐ成先ゐ成乱視〳〵したる風体を見て幸藏ハ呼止めゐ前ハ何處ゥら出なすつたと問へバ此方ハ會釋してハイ私しハ過日頃江戸近邊ゥら出ましたゥ終油斷して出懸ゥらお金を遣ひ過まして誠ゐお恥しい事ですゥ今日ハ浮飯も喰ませんゆ慈悲ゐ一膳振舞つて下さへませんゥ旦那さまと言ふを幸藏可笑さ敢へて夫ハ嘲ゥし空腹さらう浮前の名ハ何と言ふハイ八藏と申ます然ゥ實ハ己も一人旅で長の道中淋しいゥち是ゥちお前と一所ヨ歩ふ夫でも私の様な者ゥ何して浮遁連ヨなれませう何其遠慮ゐハ及バぬと或る古着屋ゐて袷一枚并ヨ襦袢股引抔買調ひて八藏を呼びこれを着替よと言へゞ八藏ハ大きゐ悦び以前の破れし着物を脱ぎすて貰ひし衣服と着替る時目早く見しハ脊中

の彫者身形ゐ似合ぬ春中の奇麗さ扨ハ此奴も編子うと幸藏心よ可笑くなりコウ八公爰等で一杯遣らふうと言ふよ八藏日ざしと見て旦那最う七ッ近ふ浮座りますゞ今晩ハ此宮の驛へ浮泊んなすつちや如何でんすと田舍めきたる作り聲幸藏も實ハ夕部の騒ぎで一夜眠らぬ勞れ身ゆゑ彼ゞ詞ゐ打任せ夫なら此處へ泊ちふと或る宿泊よ着て早速よ酒と肴を誂ちへつゝ座敷へ通つて幸藏ハコウ八公一風呂先へ這入て來るうち此懐中者を預けると鼻紙入を差出せゞ八藏ハ請取て左樣ならゞ浮肴中でも洗しませうと言ふを押止めマア茶でも呑で待て居なと風呂場をさして出行ぬ

○幸藏金子を拾ハるゝ事
幷幸藏お吉の妄想を夢見る事

彼伊勢參り八藏と言へるも幸藏ゞ察しの通り彼濟兵衛文吉等ゞ仲間の編子よして此日も己ゞ姿を變し能き仕事もゞなと思ふ折柄年倘若き一人旅の金ありさうな者を見し故付來りしを彼方より却て身形も拵へ呉懐中物さへ預けたるよ八藏心よ思ふやう彼奴ハ若や我を釣る上の役人でハなきうと薄氣味惡くハなりしものゝ彼鼻紙入を探り見れゞ八九兩の金子あるよ何しろ是ハ我稼ぎと懐中なして店へ出私ハ少し買物われゞ一寸下駄を貸呉よと日和下駄をゞ借受て何國共ゐく逃去ぬ斯とも知ざる幸藏ハ湯より上りて座敷へ來り彼八藏と尋るよ何處へ行しや更よ見へず併し預けし紙入ハ其儘其處よ有ゆゑよ手よ取り中を改むれゞ小遣ひよとて入置し九兩足ずの金子ゞ見へぬよ扨ハ持逃せしならんいやはや小量な心の奴と少しも悔む氣色なく宿の女を呼びなゞら銅卷より一分銀を取出して茶代なりと差出せゞ働き女ハ驚きて一人客ゞ茶代として是まで呉るハ二百ゟ三百夫をゞ一分呉るとハ能き編德の客人と其家の主人よ渡しけれゞ主人も早速禮ゐ出て追從たら〳〵持運ぶ誂ちへ物の酒肴酌よハ家の娘分ゐてお吉といへる十五前ゟの未通娘を紐ゟ立て馳走ゞてちよ差出すよ女好なる幸藏ゆゑ殊の外氣ゐ叶ひ戯謔言を言ひ乍ら終飲過せし草臥體今よ飽度浮出よと云ひつゝお吉の手を取よ此方ハ未だ小娘の只恥しさばゟりゐて赤らむ貞よ袖を當ておよしなさいと言ふ折しも働き女ゞ床と伸よ入來りたるよ幸藏ハ其儘お吉の手を放せゞお吉ハ後へ逡りなゞら夫でハ先々お客樣浮緩り浮休み遊ゑせと禮義を述て行んとするを見て幸藏ゞ眼で知らすよ娘も心有明の行燈引寄せ甲斐〳〵しくさらよ油を繼足して下女と連立出行ける跡よ幸藏徒然と床よ入しゞ何分ゐも昨夜ハ一夜寢ぬ故ゐ獨り枕よ付や否前後も知らぬ高鼾其夜も次第ゐ更行て旅店の者も一統よ寢鎮りたる其夜中頃此家の娘分の彼お吉ゞ宵ゐ約せし言の葉の情よ引され忍來て寢居し幸藏を搖起すゐ此方ハはんの戯言と思つて居たを誠として忍び來りし可愛さよゐ吉さん先刻うら來う〳〵と待てハ居たゞ矢張彼宵ハ待夜中ハ恨み曉ハ夢で無益な事だと思つても夢でも宜うら浮前を見樣とつひ恍々と寢て居たよ能く來て呉たと手を取て床へ引入れ初契り結ぶ緑しの小娘ゞ幸藏よ向ひ云るやう今更お咄ゲますも氣慚事とハ思ますゞ強面私の此身の上茲の家よハ始より實の子のない處ゟち知合中とて私しゞ稚い時よ貰れて子とハ成て居まもゞ此頃聞ゞ或人の媒人どゟで取極た夫ハ〳〵實に否な男を聟よするとの事勿論それハ一里先の名主さんの弟で其家ゐハお金ゞ澤山有故二親も欲よ目ゞ昏ニッ返事で受合れ否だと思ふ私しゐハ無理往生をさせまもも育てられたる恩あれゞ不承知云ふも出來ない悲しさゐ恥しい事乍ら且那の樣な浮方ならと跡ハ頼をゞ赤くして差俯向よ幸藏も猶更お吉ゞ可愛くなり私も浮前の樣な撰なら直よも聟よ成度ゞ是非大坂迄是ゟち行ねゞ事の欠る用ゞ有ゟら早速用事を濟して後又來てからちの咄しよ仕樣と言へゞお吉ハ首を振り否々何處へも遣ませんと緊搦若れて幸藏も今更捨て行のも不便と思ひ返してお吉を抱寄せ夫なら今より私と一所よ直お此家を亡命して大坂へ行氣ハないゟと言

へバお吉ハ点頭て如何樣事でも浮前樣と一所ヨ添れる事ならバ假令山荆林藪の中でも私しハ少しも厭ひませんと左樣なら早く支度を爲なせへ而して何處うち逃たら宜ちう夫ハ此庭の横手ゐ塀ゲ有ますうち其開きを明て參りませう併し外ヨ大きな溝ゲ有て私しゐハ行れませんうち浮前さん先へ出て其溝の上へ何なりと渡して置て下さへな其中私しも密りと身支度をして來ますうちと其座を立て行跡ヨ幸藏も亦仕度をなしお吉ヨ敎られた通り庭の塀の開きを明け其外の溝を飛越傍りゐ在し古板を拾つて溝の上へ渡し今や〳〵と待うちヨお吉ハ小さ風呂敷へ着替の衣類を二三枚外に櫛幷ひなど取纏めやうやく居間を忍び出て庭へ出んとする所を思ひゲけなく後より腕と押へた母親ゲ是お吉何所へ行宵うちの樣子ゲ怪しいと思ふた故ゐ付て居しゼ兼て聟さへ極りしゐ了簡違ひハ何事ぞと泪と俱ゐ異見する此方ハ親仁ゲ庭を下り彼開きより立出るヨ閨き夜なれバ幸藏ハお吉ゲ來たと思ひ逸へ危ひうち手を致しませんお吉樣と言ひ替した事も有故別れる共又別れぬ共逢ふての咄し金ヨ目ゲ昏れ約束を無ヨするやうな事をしてハ實ヨ男ゲ立ませんと言ふを親仁ハ打案じ夫ハ素より浮前の氣質併し是ハ私の寸志ヤア兎も角もと近寄て袂へ入んとなしけるを其ハ受取じと爭ふ機會ヨ如何なしけん幸藏ハ足を辷らし大溝へ眞逆樣ヨ落入ける咄嗟と一聲呼びしゲ此ハ是南柯の一夢ヨして早明近き鷄の聲ヨ驚き覺し幸藏ハ身の冷汗を拭ひ乍らアヽ馬鹿氣た夢と見たと起上らんとする折柄彼娘分のお吉ゲ來て煙草盆を出しつゝ浮目覺なれバお客樣浮手水を浮遣ひ成いませと言ふ貞倩々打見遣バ昨夜見しとハ雪と墨顏ヨ付たる白粉の處班らヨ兀たる跡へ痘瘡の痕さへ顯れしヨ色氣も覺し幸藏ハ一人心ヨ可笑くなり朝の支度を調へてそこ〳〵其家を立出つ七里の渡しも打越て既ヨ桑名ヨ懸りしヨ夕部酒をバ飲過て最も敢果あき妄想ヨ心氣〻痛めし譯なるゐや俄うに癪氣の差込みしゲ宿ゐハ離れし處故藥を飲ヨも詮方なく且見れバ大概半町計り横手の方ヨ藪蔭の小家ありしを幸ひと其所を便りて到りける

○幸藏途中病氣貧家を頼む事

幷老女を憐む事

幸藏ハ彼小家ヨ這入私しハ旅の者成ゲ急ヨ癪氣で難儀する故少し此所を貸て下され猶無心乍ら湯を一つ振舞れよと云を聞き貧子の上ゐ二枚折の古き屏風を離し中より歳ハ十四五位の娘その顏形ちハ相應なれ共未だ春塞き三月の上旬なるゐ古襦袢を一枚其身ヨ纏しのみ壁の狀さへ何結びしや油氣もなく茫々と見る影もなきゲ出來りて夫ハ嘸浮困で浮座りませうサアハ遠慮なく且那樣此方へお掛なさへましと妻ヨ似合ぬ物和らうく甲斐〻しくも欠椀へ温湯を汲で出すヨゼ幸藏これと押し頂き懷中よりして丸藥を出して漸く飲終り暫く休み居る中ゐ思の外ゐ早く落付先安心と烟草をバ薦し乍ら夫となく內の樣子を窺へバ柱ハ屈曲壁ハ落彼の破れたる屏風の中ヨ人の臭く出しなと何の氣なしヨ近寄るを親仁ハ其手を腕と捕へ待せました浮客人私ハ娘の父で浮座る宵うち浮前と娘の樣子少訝しいと見て居た所案の如く娘めゲ今逃出さふとせし故ヨ母ゲ見付て取押へ彼是異見ハしてゐるもの丶實ハ娘の聟とても未だ結納の取替せを濟したと云ふ譯でハなし夫ヨ就てハ浮前樣ハ江戸の生れのお方と云ふ串好た中なら片々ハ斷りますうち是客人聟ヨ成てハ下さちぬうと頼む詞ヨ幸藏も流石ヨ何分間ゲ惡く頭を搔き〳〵云やうハ今更となり親仁さんヨハ誠ヨ面目次第もないゲ聟ゐ成れる位なら斯して逃ハしませんと云へバ親仁ハ泪聲ヨて お前も娘ゐ浮聞ゲ知らぬゲお吉ハ私の實子でなけれど幼い時うち育つた娘浮前ヨ連て行れてハ相續する者絶ると云もの然れバ浮前も私しの願みを聞て與ぬと云ふ譯なら障りのないやう此儘ヨ今宵の事ハ諦めて跡で思つて下さるな少しなれ共草鞋錢ヨ是を進ると懷中より金を十兩取出して頼むを幸藏押返し私ハ素より金づくで色事なせハ

壁のもるゐさてハ那方ゐ病人ゐても居る事ならんと思ふ中彼娘の子ゞ水を汲て裏の方より來りし故幸藏娘ゑ打向ひ浮蔭で大きゑ快く成ましたゞゐの屏風の中ゑ寢て居なさるハ浮病人でありますゥと問バ娘ハ打蕊れハイ浮親父さんで浮座りますと言ふゑ幸藏又聞やう見れバ浮前とアノ小さひ男の子計りの樣子外ゑハ別ゑ看病の仕人もないのであるゥなと聞けバ娘ハ涙を浮べてハイ私しの浮母さんハ四五年前ゑ亡なりまして弟の太吉ハ未だ八歳浮親父さんハ今年で丁度五十一でござりますゞ去年ゥちの長煩ひ此村の庄屋樣も種々浮世話もして下されど何を言ふにも老の煩ひゐ醫師樣の仰やるゑハ人參とやちを盛さへすれバ乾度愈ると言事ゐれど夫を買にハ大壯のゐ金ゞ入るとの事故ゑ私しも當惑致しましたゞ或人の浮話しゑハ觀め奉公とやちゑ行ケバゐ金ゞ出來るとヤ事ゆゑ直其人ゑ浮世話を頼み今日參る約束ゑして置きました事なれバ頃て連ゑ來て呉ませうゞ何私しハ浮親父さんの此病氣さへ愈りますれバ何な苦しひ勤めでも堪へて致します心とハヤなゞら私しゞ居らぎバ跡の看病ハ僅ゥ今年八ッゑ成此弟ゑハ出來ますまいと思へバ夫ゞ何分ゐも心懸りで浮座り升と泪と供ゐ物語るを聞く幸藏も胸塞り貰ひ泣する袖の雨涙を拭ふて娘ゑ云ふやう不思議の緣で此私も俄ゥゑ發りし病氣ゞ愈り今又浮前の孝行を聞バ聞程我不孝親を見捨て遠國へ斯の通りの我儘旅年ハ浮前ゑ增る共心ハ劣る私の身の上就てハ是ハはんの寸志と金三兩を取出し是で病人や弟の着物且ハ浮前も寒うちふから早く何でも着るゞ能い又其殘つたゐ金を以てゐ米を買て來るゞ能い私も一膳浮馳走ゐ成度ゥちのふ姉さんと云はれて娘ハ飛立許り嬉しけれ共心の中始めて逢し其人ゑ金を貰ふの所謂ハなしと思へバ疾ゑハ受取ぬを夫と察せし幸藏ゞ種々樣々ゑ慰めけれバ娘ハ悅び押戴き夫でハ仰せゐ隨ひまして買調へて參りせうと繃伴の前ハ合せても膝ゥち下ハ顯出しの脛をバ包む前掛ゑ形作りて出行ぬ跡ゐ幸藏ハ彼弟の太吉ゞ遊び居るを見ながら煙草を薫し居る折柄年頃三十位の男田舍者ゑハ氣の利し小紋の羽織を引懸しゞ内を覗ひてゐ市さん是ゐ市さんと云ひ乍ら這入來れバ娘ハ居らず其所ゐ幸藏ゞ居るを見てハイ浮免下さいまし私しハ近所の者過日既ゐ此村の庄屋殿始め相談ゐて此家の娘のゐ市さんを勤奉公ゑ買入る其約束も調ひまして金子を持參致せしゞ娘ハ何處ゥへ參りましたゥと問れて幸藏曾釋なし是ハ〳〵此間中から色々浮深切の由承まはり眞ゑ有難ふ存じます私し事ハ此家ゑ些遠緣のある者ゐて疾より難澁致す由ハ送り越したる手紙ゑて承知ハ致して居りましたゞ何分商賣の闕しさゐ終々出兼ました處漸々此度大坂へ用事を兼て出立致し今方參り合せたむうり那ゐ市ゑハ種々と買物をさせ、ゑ遣ハしましたゞ最私しゞ參る上ハ勤め奉公ゑも及びませぬ故折角の浮骨折乍ら此事ハ破談ゐ浮顧みヤたし是ハ誠ゑ輕少乍ら浮着でもと金を一兩紙ゑ包んで與ふるゐ彼男ハ悅びて夫ハ誠ゐ結搆の事實ハ私しも斯樣の事ゐて活計を立て居りますゞ此家の娘のゐ市さんハ實ゑ評判の孝行者家業ゑ致す私しさへ心快ない勤め奉公夫を貴君ゞ浮出ゑ成て是ゞ破談ゑなりましたハ誠ゑ機の宜い事で私しも嬉く思ひます併し多分の浮祝儀を頂きませしてハ濟ませぬゞ折角の思し召ゐ有難く頂戴と金を懷中ゑ受納め左樣なれバ浮客さまゑ又々浮目ゐうゝりますといと早足ゐゞ立歸る跡ゑ幸藏ハ心の中金さへ貰へバ能のだちふゑゐ世辭を言て行とつた夫ハさふとゐ市とやらも最早歸つて來るだらふと眞黑ゑ成し自在竹ゑ茶釜を掛て居爐裏の中へ枯枝抔をさし入つ火を焚待こそ殊勝なれ

○幸藏大坂へ到着の事

并近江屋喜左衛門ゞ事

幸藏假令惡人なるも富有の人の金を以て他の貧人を救ふと云ふ非志操ハ格別なり然れバ不淨の金錢も孝女の爲ゑハ天の惠み娘ゐ市ハ庄屋へ行て救助を愛し事を咄し夫より街道の藥種屋ゑて一兩目の人參を求め又貰ゐ置し病人

の夜着布子抔よりして弟太吉が晴着とする松葉色の袷と春駒を染出した小立の綿入自分ハ亡母が手織の布子彼是倶ゑ受出し其外米味噌買調へ近所の友達娘を頼み其品物と二人連ゐて携へつゝも立歸るを幸藏手傳ひ運び入れ其友達娘ゑも小遣ひ抔を遣ハして猶彼是と世話をやくゑゐ市ハ彌々喜びて何うら何迄調ひまして此樣嬉い事ハ有ませんサア伊飯を焚てと云ふを幸藏堅く押止め實ハ私ハ空腹ないが伊前が遠慮をする故ゐ先刻の樣ゐ云ふたのゆゑ飯拵へハ跡の事早く病人ゑ藥を上げて能く看病をして進ゐさい夫うら先刻勸め奉公ゑ世話をする人が來けれ共私が江戸の縁者と云ふて夫を斷つて歸した故其邊の事ハ其積でと云つゝ又もや懐中より金子廿兩を取出し伊前能く聞なゑ此金を上るうら何う商賣でもすると云物う田地でも買ひいゑ物う庄屋樣ゐても又ハ外ゐ深切の人をゐ頼みゆとも能樣ゐして貰ひなさい何でも伊親父さんを大事ゐするが一番肝腎の事だよと金子をゐ市ゑ渡けれが此方ハ大いゑ肝を潰し此樣ゑ澤山頂きましてハ濟ませんうらと押戻すを幸藏ハ手にも取ず私ハ路用も澤山あるうら決して遠慮にハ及ばない若も人が此金ハ誰うら貰つたと聞たなら以前伊親父さんの懇意の者が江戸へ出てうら運が向き今ハ立派な商人ゑなり此度幸ひ大坂へ仕入ゑ登つた道すがら尋ねて今の雜儀をハ救つて呉たと言て留な扨夫でハ伊親父さんも能く賤て居なさる樣子故私ハ逢ずゑ行程ゑ宜敷ゆてゐ呉よと言ひつゝ幸藏立上るをゐ市ハ綿袢の袖さへも嬉し涙ゑ絞ながら只今伊膳も出來ますうらと止るを幸藏袖振拂ひ縁が有たら又逢ませうと道を急ぎて行過る跡ゑゐ市ハ後影の見えず成ても伏し拜みぬ扨幸藏ハ道々も能き巻根をしてけりと心の中ゐ悦びつゝ幾日う重ねて目ざしたる大坂へと到着し其頃天滿の邊りゑて近江屋喜左衛門と言ふ評判の大家の旅籠屋へ宿を求め我ハ江戸の者成ヶ尙德の者も三四人跡より此家へ來る約束故何卒う別間を借たしと小判一枚茶代ゑ出せハ黄金の色ゑ迷ひぬるハ何所も同事ゑして直ゐ心を奥の間の離れ座敷へ案内して下へも置ぬ饗應ゑ先幸藏ハ湯へ這入酒と肴を誂へて夫々女ゑ祝儀を遣う緩々酌をさせ乍ら姉さん一寸伊願ひさが内の旦那がゐ宅なら伊目ゑ懸つて私しが伊聞ゆ度事があるうら伊聞敷も少の間來て貰ふやうゑ傳ひてゐ呉と頼むを聞て其女が夫ハ誠ゐ憎生さゑ萎程旦那ハ他出して未伊歸りになりません故如何の事う今晩の迚も伊聞ゑハ合ませまひと云るゑ幸藏打点頭イヤ何强て急ぎハせぬゆゑ歸られたなら翌日でも宜うら序ゑ云ふて下さいと頼みて其夜ハ床ゑ臥扨翌日も草臥直しと朝より酒を取寄せて女を相手ゐ飲ながら亭主の歸りを待居りしゐ其日の巳の刻過る頃主人喜左衛門が歸りし由ゑて昨日の茶代の禮とて酒の肴を持參して只今伊目ゑ懸りますと下女の知せゑ幸藏ハ然であるうと打悦び相手の女ゐ酒肴を猶十分ゑ誂へさせ亭主の來るを待中ゐ四十許りの人品能き男が程なく出來り我等ハ當家の主人なる喜左衛門とヤすす者と時候の挨拶抔をして何う私しへ伊尋ねの伊事有とヤ事如何成子細ゑござりますや早速仰らるべしと述るを聞て幸藏ハ尙叮寧ゑ會釋なし先一献と盃盞を献せハ主人ハ受戴き暫しが程ハ四方山の咄ゑ時を移せし折酌の女が店へ行しを見て幸藏ハ喜左衛門ゑ我等が伊身ゑ尋度と云しハ別の義ゑも非ず今此大坂ゑ名の高き淀辰といふ博奕打の親分ありと聞居たるが定めし伊身も伊存知ならんと問ゑ主人ハ胸の中飛さ事を聞奴なり殊ゐ年ハ若けれ共一癖有べき面魂ひ何ゐもせよ試みんとシテ其淀辰と云ふ者ゐ何う伊用有ての事う勿論土地ゑ名ハ高けれど離とて顔を見知し者なし伊身樣ハ何の譯で伊尋なさると問返され夫と打明云れぬ事ゆゑ別ゑ差たる用事ハなけれど名高い人故一遍ハ逢て置き度と思ふなり就てハ伊亭主の伊世話ゑて伊引合せ下されまじきや如何でせうと又問ハ主人ハ少し思案せしが夫ハ隨分私しが其手續きを以て閉合さハ知れざる事ハ有間敷然らハ今夜隱密と我等と一所ゑ伊出あ

れ此所ハ博奕の流行土地ゆゑ其道の人を頼みて見んと云れて幸藏大ゴ悦び左様ならバ何分ゴも宜敷お頼み申ますと夫より酒宴ゐ日を暮せしゲ喜左衛門ハ夜ゴ入しより時刻を計り率とて幸藏を催がせバ幸藏も亦身支度して倶ゐ道程一里も行しゴ既ゴ大坂の町家を放れ何と云る所ゥ知らねど大川へと來りけれバ喜左衛門ハ岸ゐ繋ぎし小船ゐ幸藏を乘せつゝ倶ゴ向ふの岸ゴ移り夫より平山を打越て生茂たる並木を行ゴ其木影より八九人の大の男ゲ長脇差を横へ乍らのさ〳〵と其處へ出掛て來りしゐゾ幸藏不審の者共と思ふ折柄其者共ハ喜左衛門ゴ打向ひ頭今夜ハ早き淀出と云を喜左衛門ハ打笑ひ今夜ハ珍ら敷客ゲ有て一緒ゴ連て來しなるゲ何ゥ得者ハ無つたりと云へバ彼等ハ口を揃へて未だ此通り宵で淀座れバ別段得物もありませぬ後程淀目ゴ懸らんと何國ともなく立去ぬ

○鼠小僧淀辰ゴ對面の事
幷淀辰奇術を見する事

判の端ゴ片假名のタの字の極印夫も一枚ゥ二枚なら又兎も角もと云ふべきなれど二三百兩所持の樣子ハ今日酒盛の其時ゐ此黑い眼で見扳しなり殊ゴ曩頃彼家へ盜人三人押入て四千三百の大金を奪ひ去んとしたる時二人ハ其場ゴ召捕れて四千の金ハ取戻されしゲ三百兩を懐中せし一人ハ行衛知れざるより其被縛し二人の者より逃し一人の容子を糺し人相書ゴて詮義をバ嚴敷すると云ふ事を手下の者ゲ聞傳へ昨夜私への咄しゴよりお主ハ其夜逃去し一人ゐ相違なからうと私ハ篤より察したりと云れて幸藏感心なし流石ハ親分眼ハ高い寶ゴ淀察しなすつた通り吉岡村を逃去し一人と云ふハ即ち此身且又外の二人と云ふハ清兵衛文吉と言ふ奴ゐて高の知れたる讒魔の灰元來餘ま り强欲ゴて私ゲ金をバ減せと言を物惜みして彼是とぐづ〳〵したより召捕れ憂目を見たハ慇然なれど夫ハ今更詮方なし偖今我等ゲ遙々と此地へ來たハ外ならぬ世上の金銀不廻ゴて貧乏人のみ澤山なれバ我心願ゐハ富有の者の金を殘らず盜み出して湯水の如く遣ひ捨我身の榮曜を爲すハ勿論又困窮の者共へ施し與んと思ふなれども中々江戸の中ゴてハ多くの金を取出し難く此大坂ハ昔日より金の集まる處なれバ此地ゴ於て働らんと思ひ極ハしたものゝ我一人の力ゴて成し負すべくも非ざるより隙て江戸ゴも評判ある親方の名を慕ひつゝ助けを受度參りしなり何卒今日より力と成て私の願ひを遂させてと言を聞より淀辰ハ其大膽を褒そやして其ハ面白し〳〵我も手下ハ多くあれどもまさゥ江戸まで此身の名ゲ通つて居るとハ知ざりしゲ斯まで聞えて居し事ゥ此高名ハ身の譽ゥ但しハ是ゲ不仕合ゥ身の浮沈みハ知れぬ世の中何しろ人ハ相見互ひ此末早晩私とても江戸へ行まい物でもない就てハお主へ近付の印ゴ今宵大坂の手始め仕事ゴ直是ゥち能い手引の處あり先々當座の金儲をさせてやらんと言ふ詞ゴ幸藏ことゴなく打悦び此上共ゴ宜樣ゴお願み申と云者を聞く淀辰ハ點頭て去バお主ハ暫時の間私ゲ言語ゴ從はれよと先兩

扨幸藏ハ喜左衛門の樣子を見しより盜人と推見せし故心の中可笑く思ひて云ひけるハ淀亭主今の人通ハ淀身の手下と見受しゲ开も實名ハ何と呼るゝ匿まず聞せて下さいと云へバ此方ハ笑ひながら何とゥ隱さう此私ハお主ゲ尊る淀辰なり今のハ實ゴ察しの通り私ゲ手下の者共ゐて外ゴも四十人餘ゥ先ゐ淀主ゲ淀辰ゴ逢たいものと云ひしゥ共壁ゐ耳ゐる世の中故願ゐハ名乘明さゞりしゲ私も淀主を仲間の者と早くも推察なせし故爰迄連て來た譯じやと云ふゴ幸藏打驚き扨ハ此地ゴ名も高き淀辰親分ゐて有しゥ然とも知ず先刻より慮外の段ハ眞平淀免斯ゲ上る私しハ江戸江川町ゴ住居なす鼠吉兵衛と申博奕者の悴幸藏と云ふ者なゥ何分此後ハ淀慇懃にと禮儀を盡して又云ふやゥ扨親分ゲ私しを仲間の者と知れしハ如何の譯と怪しみ問バ夫ハ淀主ハ知るまいゲ昨日茶代と出して呉た那小判ハ穿てよりゥ慥ゥお見覺へある金ゐて岡崎驛の在所成吉岡村ゐ知られたる太郎左衛門ゲ所持の金匪據と云ふハ小

眼を共ゑ塞げせ夫より一個の切包みの樣なる物を幸藏の懷中へと押入れつゝ此身が可と云ふ迄ゐ眼を開ひてゐならないと堅く戒しめ手を取て二足三足行けれゞ俄ゑ聞ゆる三味線太鼓其音さへも調子能く殊の外なる賑ひよて女の聲抔手ゑ取る如くやんや〳〵の大騒ぎゑ是ゐ妙だと思ふ折柄いざ眼を開ひて見よと云れ幸藏發と眼を開けゞ此處や彼所ゐ提燈燭臺燈し連ねし有樣ゐ實を欺く許りゐて數多の女が舞唄ひ全盛言はん方もなし然るゑ斯程多勢の中ゑ幸藏イみ見物すれど雛とて咎むる者もなきゑ不審と起して居るを見て又淀辰が目を塞げと差圖するゆゑ幸藏ゐ以前の如くおしけるを又もや二足三足歩行せ薄闇き所ゑ至りしと心ゑ思ひ當りし時又目を開けと云ふ故ゑ再び目をゞ開き見るに其兩側ゑ金箱がひしと積重ねありけれゞ幸藏俄ゑ横手を打ち成程是ゐ不思議なり先金箱を一ッ取んと手を出し撫れゞ忽ちゑ今迄少し明るゝりし座敷も何時しゝ眞の闇さて殘念と思ひしゝど何ゑしろ爰迄來たものを取ずゑ歸るも馬鹿氣た談しと尙探り寄て其箱へ手を懸持んとなしたるゑ何とゝしけん底をも知ぬいと大なる落し穴へ眞逆樣ゑ陷りたり此方の淀辰聲をゝけ者尾ゐ如何さと問けるも幸藏夢の覺たる如く只茫然として居るを淀辰大いゑ打笑ひ是式の事ゑ驚く事ゝゐ聞りせよと言れたるゑ幸藏甚だ膽を潰し扨々奇代の妙術ゝお親分とも頼みし上ゐ此妙術も請たしと言へゞ淀辰考へて成程餘人ゐ兎も角も膽を見拔しゐ主故我此奇術を讓つても苦しゝらざる事ゐれゞ是ゐ容易ゑなし難し扨其仔細如何と云ふゑ術を受れゞ一生涯女の肌ゐ觸ぬなり若誤つて身を汚さゞ立處ゐ命を落さん然れゞ是ゐよしゐして外ゐ與ふる守符ゐり是を肌ゐ付置時ゐ走走る事自由自在必ず大切ゑ所持すべしと懷中より取出し渡すを幸藏取て押頂き肌ゑ付れゞ淀辰言ふ樣外ゐ咄しも澤山ゐれ共今夜ゐ一先此場を去て家で緩々休ふと元來し道へ立歸るゑ故守りの功驗なるゐや幸藏歩行ゐ足輕く傳行しと思しゑ既近江屋の旅店ゑ着ぬ

○强盜淀辰素性の事

幷初代淀辰鰐右衛門ゑ殺さるゝ事

幸藏既ゐ淀辰が奇術を誠じて其傳授を頻りゑ請度思ひしゝども一生女の肌を觸る事のならない術なりと聞てゐ此つも思案もの人間僅の壽命を保ち彼樂しみを盡さゞゞ術を受るも甲斐なしと念を止めし幸藏が其夜ゐ終ゑ打臥しが翌朝食事も濟し折柄淀辰來りて云へるやう夕部ゐ嘸かし勞れしならん夫ゑ付ても聞たきゐ吉岡村の極印の金ゐ何程ある事や此地ゐ目明澤山ゐて油斷ならざる土地なれゞゐ主が彼金を蒔散さゞ夫より忽ち足が付き遂ゑ大事となちん程ゐ私が悪皆取換て遣ふと云ふゑ幸藏悅び實ゐ江戸の田町ゐて云々斯云ふ手術を以て百兩の金を取し故道中多分の金も入ず此地へ斯して來る迄ゐ彼三百兩ゐ封の儘少しも遣とず持て居て一昨日始めて其封を切しもの故氣も付ざりしが兎ゑ角三百兩の内一兩減りしのみなりと其事情を告せつゝ極印金を淀辰ゐ渡して宜敷賴みますと云へゞ淀辰受取て夫でゐ慥ゑ請取たと已が居間へと持行しが程なく金を取換來り數を改め幸藏ゑ一々渡して云ひけるゐ此大坂ゐ金錢の集る所と云ひ乍ら盜み取るゑゐ困難〳〵中々骨の折る土地我手下ゑゐ隨分共ゐ働く者もあるなれど四五百と云ふ大金を盜むゐ誠ゑ稀なことゐ主も能々心を用ひ先々氣長ゑ働きなと云ふゐ幸藏禮を述べ其金員を懷中しながら今日ゐ眞ゑ天氣も能く家ゑ居まも氣鬱故所々を見物致し度いと云へゞ淀辰頷づいて夫でゐ幸ひ道頓堀ゑ我片腕と頼んで居る疊屋三右衛門と云ふ者あり是も矢張旅籠屋なるが機轉の利た者ゐれゞ是へ便つてお見なさい私が手紙を添る程ゑと紙面を認め渡されしゑ添けなしと幸藏ゐそを懷中して暇を告げ此家を立出で其道にて手土產などを買調ひ道頓堀へと行ゐけり

傳ゑ曰く淀辰と言ふ者の素性を尋るゐ親ゐ寛政の頃大坂ゐ隱れなき船乘ゐて淀辰五郎と言ひし者なり此辰五

郎ゲ盛りの折日吉丸と言ふ船ヨ荷物を積込江戸を指て出帆せしゐ時しも五月雨頃ゐして俄ヨ暴風吹起り船ハ今ヨも殺へらんとせしゐぞ辰五郎始め六七人の船頭共丹誠を抽んで働きたり然れども風ハ彌々烈しく空ハ一面ヨ曇り雷鳴轟き山の如き逆浪船を宙天ヨ打揚げ又ハ打下し海路ハ真黒ヨして黒白を分たず人々生たる心地なく只神佛の名と唱へ死を待より外なゥりしゐ辰五郎ハ髷を切て海中へ投入祈誓なしけるハ何卒龍神忍りを止め此船を恙なく江戸へ着しめ給ひさすれバ此後海上へ出る毎ヨ人間一人宛を牲犧ゐ捧ぐべしと一心不乱ヨ願ひしゐ何成悪龍神も聞入れしよや又ハ暴風の止む時あるゥや次第〳〵ゐ海上穏ゥになり空も晴行星の光りも見ゆる様ヨ成しゥバ辰五郎扨ハ我一心を龍神ゲ納受有しと見えたりと天地を拜して悦びつゝ船中の者を見れバ皆々色青ざめて更ヨ正躰なゥりけるヨぞ辰五郎ハ嘲笑ひ扨々言ひ甲斐無奴原ゥおと言乍ら四十有餘の一人の船頭を引立て其儘ヨ海中へ滅ぶと投たり外の船頭驚くをコハ龍神ゐ贄ひし牲犧なり言ふて辰五郎ハ船を港へ着け破損抔を繕ひ悦びの酒酌交し面して難なく品川沖へ船ゲゝりし荷物を送て後今迄用ひし古帆を賣拂ひ新ゐ白帆と繕ひ丸ヨ龍と言ふ字を染出して龍丸と名付ぬ是龍神の爲ヨ助けられしを表せしならん夫より後難風ヨして船路の通行仕難き時ハ賃錢を倍増ゐ取て合しゲ船を出すゐ何ヨても船頭を一人宛投込たり斯て思ふ樣ヨ乗切る事の出來るヨ後々ハ我手の者を殺さんよりハ他の船の者を牲犧ゐせんと舳先ゐ仕懸をして海上ヨて態と他の船ヨ突當てハ其船を打毀し人の三四人宛も一度ゐ殺しける事七八年此事自然と所々の風聞と成て船頭共言ひ合けるハ若も海上ヨて龍と言ふ字の帆を懸し船を見バ手早く逃去べしと其噂高ゥりしゲ其頃奥州ヨ鰐右衛門と言ふ船頭ゐり彼ハ身の丈六尺九寸ありて筋骨逞しく名高き船頭なりし嘗近頃龍丸の大悪人辰五郎の噂を聞て憎き奴なり我彼奴を退治して諸人の憂を除ゥんと姿を變て大坂へ登り儲の商ひを始め辰五郎方へ手續を求め立入て我も商賣の片手業ヨ船の手傳ひせんと思へバ侍遣ひ下さるべしと願み置しゐ或時難風の折柄辰五郎船出をなせしヨ其時海上ヨて他の船を見懸ざりしゥバ我同船の者を牲犧と爲の外なし就てハ幸ひ鰐右衛門を誘引しゆゑと海上三四里も出し處ヨて貯へ置し酒を出し鰐右衛門に飲め海上安全の神酒なれバ十分と飲べしと云ふ鰐右衛門扨ハ我を醉つぶさせて殺さん心なりと察せし故態と裸ヨなり我も難風行の船の乗始めなれバ親方へも一盃上げんと大茶碗へなみ〳〵と酒を酌ぎ一喫と一口ヨ飲乾サアと云ひ乍ら茶碗を取て辰五郎に打付コレ辰五郎我を誰とゥ思ふ奥州の鰐右衛門と云ふ人ヨ知られし船頭なるぞ汝ゲ此年月多くの人を殺すと聞海上の災ひを拂ハんと姿を變て仲間ヨ入込み此難風を同船せしハ汝を殺さん爲おりと首筋掴み引寄れバ辰五郎も打驚きしゲ何程の事やあると鰐右衛門ゐ立向ふヨ思ひの外力量強く小兒の如くゐ取扱ハれ半死半生ヨ打叩れ働きもならぬを鰐右衛門ハ細引ヨて縛め乗合せし船乗共ゐ彼ゲ年來の悪事ハ何れも知りつちん殊ヨ此頃風聞高く他の船頭此龍丸を見る時ハ皆々道を除て見られぬ樣ヨなせバ自然牲犧ゐするヨ乗合の者を殺す樣ヨ成ぬ然バ汝等ゲ命迚も何時しゥ彼ヨ捕るゝ處且今迄殺されし同業の仇なる此辰五郎をさひなみ殺せと云ふゐ皆々悦びて鰐右衛門ゲ下知ゐ從ひ辰五郎ゲ髻へ細引を結付海中へ投入又ハ引揚げ投入れて終ヨ細引を切捨ければ逆巻涙ゐ包まれて行方も知れず成ヨける扨も其船ハ恙なく江戸品川へ着しければ毎もの如く荷物を揚終ゐ大坂へ歸帆の上町奉行所へ逐一ヨ辰五郎の事を訴へしヨ浦吟味の上辰五郎の家財ハ闕所仰付られ妻子ハ親類へ預下ヨ成ぬ又鰐右衛門事ハ上の浦評議有て數多の浦褒美を賜り晴の錦を飾りて古郷

奥州へ立歸りしと又親類へ引渡されし辰五郎の妻子ハ所持の金子も澤山あるゆゑ旅店を出し辰五郎の一子を近江屋喜左衛門と改名させぬ去共是も親ゐ似て大膽なる者故壯年よして妖人ゐ奇術を習ひ盜人と成しより親の名を受て淀辰と言ひ觸せしゞ今ゐてハ四十人程の手下も付て榮花ゐ月日を送りける

夫ハ扨置幸藏ハ彼淀辰の引付にて道頓堀の旅人宿なる三右衛門の宅へ至れバ女共が取次て先此方へと叮嚀よ奥二階へ案内されしよ幸藏一間よ座り込て主人の出るを待折しも後の唐紙ゐし明て上意〳〵と左右より捻上んとする不意の捕方早くも幸藏身を換せ捕方二人ゞ襟髮を聢りと取て押へ付け猶も眼を見明いて邊りよ心を配つたり

○三右衛門幸藏よ豪家の手引する事
　并鼠小僧織越の家を訪る事

其時此家の主人なる三右衛門ゞ出來り是ハ〳〵幸藏殿ゆ手の内感心せり金藏才助兩人も大よ ゆ苦勞〳〵と座を改めて挨拶なし扨今お主ゞ持參せられし彼書面ゐて樣子も知り且ハ度胸を試し見よと淀辰よりの詞も有る故子分ゞ居しを幸ひよ鳥渡間似合の似捕方必らず心よ懸玉ふなと云れて幸藏安堵なし先三人ゐ近付の詞を述る其中よ早持來る酒肴四人一座の酒宴も同氣求むる相性ゐて三右衛門ハ幸藏に是より一里半許り道程離れし在所よて字を花又と言ふ處ゐ仕事よなるべき豪家ゐり夫ハ勿論此頃の出來分限でハあるけれど織越茂十郎と云ふ百姓で仲間の者ハ忍び入んと度々狙ひハ付るものゝ中々よ用心嚴くして入事ならぬいま〳〵しさゐ主此地の手始よ一ト働きしてハ如何と言れて幸藏大よ悅びつゝ夫ハ一人で働て見たし併し私も上阪たゞりで土地不案内の事なれバ日蚤の中よ其處へ行て樣子を見屆け置たしと言バ三右衛門も尤もなりと夫より漸々盃盞を納め率とて子分ハ宿よ殘し三右衛門と幸藏兩人花又を指て行けれバ程もあらせず織越の家の近くへ來りしよ三右衛門ハ幸藏ゐ目立ぬ樣ゐと目くせして樣子を大概歎へし上我等ハ少々用事もあれバ何れ明日逢んとて其儘袂を分ちたり幸藏跡ゐ只一人織越の家の樣子を見るゐ成程何分嚴重よて忍び入るやうわらざるより工風なしつゝ路を轉じて古道具屋を尋ね行き其處ゐて直安の大小を求め旗侍士の如くゐ扮立ち且竹杖よ縋りながら其日の暮る頃織ひゐ織越の家よ到りて我等元來浪人なるゞ長の煩ひゐ路用ゝ遣ひ難儀至極を致す者大家と見受て一宿を乞無心ヤ度參つたりとさも哀れ氣よ言述れバ内より此家の重立し召仕ひの者なるよや四十有餘の男ゞ出て成程乞見受ヤ所未だ乞年若の乞身よて乞大備の其乞樣子一夜位の事なれバ乞止ヤして遣たけれども乞存りハ知りませぬゞ此頃當所近邊ハ盜賊多く徘徊致し誠よ物騷の時節なれバ假令乞病人よても見知らぬ乞方を乞止めヤすハ何分參ちぬ事ゐりと譯を話して斷るを幸藏尙も手を突て乞尤もよハ存ずれど尾羽打枯せし痩浪人殊よハ病氣上りの事にて最早備の道程も歩行兼たる難儀の身體何

卒伊家の新禱とも思召れて一夜の伊慈悲と下さるやうよと只管頼めば兎よ角暫く待給へと彼召使ひハ奥へ行しが良有て出來り委細の事を主人ゟ告しよ夫ハ定めし伊難儀ならん一夜の事なら伊宿ヤせと主人も承知致せし事ゆゑ先洗足して伊通りわれと云れて幸藏打悦び種々禮を述つゝも足を洗ひて案内よ連れ一室の中へ通りければ間も無膳を持來りて夕飯さへも進められしよ尙々厚く禮を述て漸く飯を喰終れば又彼以前の召使ひが夜着布團をば持來りて先伊脇手ゟ伊休み有べし小用へ行よハ那を廻つて向ふの方へ突當れハ雪隱なりと教へ置き又幸藏の枕元へ手燭を置て出行ぬ幸藏床よ入りし後暫し考え居たりしが家内の樣子を伺ひてそつと寢所を忍び出閨さ處を探り〳〵奥の一室よ到り見れば襖越しよ火影の見ゆるゟ是ぞ主人の居間ならんと身を忍ばせて遥間より内の樣子を伺へば年頃六十有餘の老人十露盤を前へ置き帳面を調べ乍ら百兩包を拵へてハ小笠筒へ入るゟ幸藏篤と見定めて元の座敷へ窃かよ歸り又床ゟ入て夜更を待よ早丑滿過とも成しを時分ハ宜と起出て今度ハ手燭へ灯を燈し盛所へと到り見ればいと大なる居爐裏の上の自在竹よ茶釜を掛ゟ又其側よハ松葉枯枝澤山積てありければ幸藏そつと其中へ其蠟燭を差入つすぐ火の移る樣よなし元の寢間へと忍び歸りそら鼾して居たりけるよ彼蠟燭より燃上り次第〳〵よはち〳〵と音の烈しくなるまゝよ黑煙家内よ行渡れば人々驚き目を醒し火事よ〳〵と立騒ぎぬ

○幸藏大金を土中へ埋むる事 并三右衛門三ケ條異見の事

扨織越の家よてハ夜中よ至り盛所より燃上りたる鹿相火よ家内の周章大方ならず殊ゟ主人の孫十郎ハ寢番の儘ゟて馳行つ水よ〳〵の差圖よつれ家内ハ殘らず盛所へ行集りし樣子を計り幸藏ハ見覺え置し主人の居間へ忍び行き手早く錠前押明て彼小笠筒より百兩の包を五個取出し以前の如くよ錠を下し夫より庭へ下立つゝ閨ひの板塀を安〳〵乘越え畑の際へ飛下て盛上てある畑の土を深く堀て其中へ今盗み來し五百兩の金を埋めて元の如くし又其上へ細き竹を挿て己れが見覺えとし以前の塀を乘越て庭より内へ這入ながら其處等のぞりを能くなして自分の寢間へ歸りし頃ハ漸々失火も鎮りて人々安堵の折なれば此方ハ都合が宜つたと獨り笑ひを含みつゝ布團の上よ座し居しよ早東雲と成し時昨夜世話をなし呉しゝの男が入來りて折角休み居られしを不時の事よて客人よもさぞ〳〵猛々しく在せしならんと挨拶されて幸藏ハ氣の毒貞よ座を改め誠よ不時の災難ゟて伊家内何れも大なる伊心配よて有しならん併し早速消れしハ恐悦の事なりと當座を繕ひ夫より猶も言ひけるハ斯伊取込よ長居致をハ却て伊邪魔よなる事故最早伊暇仕つらん然ば伊主人へハ伊身より宜く伊禮を申呉よと禮を述れば彼男ハ先々お湯漬抔喰て緩々出立致されよと留るを此方ハ絶て斷り來りし時の竹杖よ跟蹌〳〵として其家を立出樣子如何よと伺ふゟ織越方ハ鎮火せし悦びなりとて酒酌替し村より大勢集り居れど表ハ未だ淵暗く人の往來も非ざれば彼庭口の塀の前なる見覺え置し竹を引抜き土を返して改むるよ是ハそも如何よ入置し金子ゆ今ハ非ざるに流石の幸藏仰天して正しく爰へ埋めしゟ人よ見られて盗れしゝと暫く茫然たりけるゞまゝよ只取る金錢ゟ心配してハ間ゟ合ぬと足を早めて三右衛門の宅へ歸ちんと道頓堀へ來ハ來りしゞ何分ゟ手よ持居たる油揚を蔵よ攫ハれし心地して氣色惡さよ幸藏ゞ今日ハ劇場でも見物して夕方疊屋へ歸ちんと角の芝居の邊りへ來るよ兄貴〳〵と呼ぶ者ありはてなと幸藏振返れば三右衛門ゞ子分なる彼金藏ゟてありたりき其時金藏云ひけるハ親分ゞ伊身よ達度と今朝此私と才助と道を逢へて歩行しゟ何所へゟ出ゝ分らなりつたゞ幸ひ爰で伊目よ懸り先々胸も落付た既てハ疾々伊出われと云よそんなら一所よ行よと打連立て至りければ例の二階へ誘ひて三右衛門ハ幸藏ゟ昨夜の首尾を尋るゟ幸藏頭を搔ながら今

親分ゐ咄すのも賈ふ面目ない譯だゞ兼て言れし其通り用心嚴しき那家の搆ひ中の樣子を知ずして無闇ふ忍び入も危ふく依て斯樣〳〵ふして首尾能く五百兩盜みしゞ其儘逃てゝ我仕業と直ふ知るゝ目の當り夫故態と塀際の畑の中へ埋め置き明方行て尋ねしに蛙さへ見ぬ贅骨ゝ高の知たる五百兩又能き事も有ふりと延喜直しゐ芝居でも今日ゝ一日見物仕樣と思ひし處へはしなくも金藏殿ゐ行逢へゞゐまへゞ用ゞ有との事故連立歸りし譯と言ふを三右衛門ゝ額へ手を當ゐ主ゞ手段ゝ隨分宜し然れども火業をなしたるゝ眞ゐ拙い策略この世の中ふ盜賊の仕方も數多あるなれど罪なき人を殺す事人の住居ふ火を放つ事他人の妻女を奸淫する事此三ッゝ惡事の極あて古昔よりして名ある賊ゝ右の惡事をなさぬなり幸ひ昨夕ゝ風もなく殊ふ家内の人々も早く心付し故大事にならで宜しりうしゞ以後ゝ必らず愼しみ給へと盜人ふも又一理ある疊屋三右衛門ゞ異見を聞き幸藏大きふ恥入て實ゐ親分の言るゝ如く我も心ゐ快氣ゝ思ひし譯ゐゝあらざれ共外ふ是ぞと趣向もなく折角土地の手始めゐ道入込だ甲斐もなく空しく歸るも殘念といはゞ苦し紛れの徒ち事此後ゝ能度慎しみますと後悔面ふ顯れるゝふ三右衛門は大ゐ感じ實ゐ彼主ゝ見上し者なり我等ゞ出過た異見をゞ腹立もせず得心せしゝ流石大氣の江戸育ち夫ゐ付てゝ主ゞ盜みし彼五百兩ゝ一枚も不足を生せず爰ゐゝ受取られよと言ながら手箱の中より五包を率と許りふ耳を揃へて幸藏ゞ前へ差出せゞ此方ゝ失いふ倘れ果て何して親分此金とと云るを三右衛門打笑ひ昨夜ゐ主ゞ行し跡未だ土地馴ぬ不案内と案じて見れゞ寐られぬ儘ふ寐よとの鐘の亥中頃徐々織越ゞ村へ行て家の廻りふ伺ひしふ八つ過る頃家内の騷ぎ火事よ〳〵と云ム聲ふ猶も忍んで居たりし折雖とも知らず庭口の塀を乘越え畑の中へ物を隱して又元の塀を越て内ふ入る故跡へ廻つて塀出し見れゞ夫なる五包是ぞゐ主ゞ仕業よと思へゞ其儘打捨て立歸らんとせしゝも石も物云ふ此世の中若も他人ふ見付られゐゞ却つてつまらぬ譯なりと懷中なして歸りしゝ何せ此家へ歸らるゝゐ主へ手渡しする心と言れて幸藏疑ひ晴扨も〳〵と三右衛門ゞ其親切を謝して悅び偕改めて言やうゝ我等ゞ一旦なき者と思ひし金の手ふ入りしゝ全く親分の淨蔭故此金ゝ貴方と私と二ッ分此後ゝどうう兄弟分ふして下されと言ふ詞ゐ三右衛門も打悅び兄弟分ゝ我よりも實ゐ願ふ事なれども ゐ主の盜んで來た金を假令半分なりとても我等ゞ貰ふ所謂なし只ゐ主ゐ言ふべき事ありゐの淀辰の手下共ゝ四十餘人も有なれゞ彼等へ何程ゝ仲間入の印を遣ゞ何ゝふ付萬事都合も宜ちんと言ふを此方ゝ承知して夫ゝ疾うち思ふて居る事そんなら兄貴此金ゝ無き物として五百兩の内三百兩ゝゐ前と淀辰又此私と割符して殘りの二百兩ゝ近江屋の手下の衆へ能き樣ふ何卒分て下されと言ふゐ今更三右衛門も夫迄とゝ辭退し家て夫なら然言事ふしやうと夫より酒宴を催して又幸藏を饗應たり扨また子分の金藏ゝ先ゐ才助を尋ゐ出しゞ漸く連立歸りしふゞ幸藏ゝ二人に向ひ今日より親分三右衛門と兄弟分ふなりたりと先此事と語り聞せてゐまへ達ゝ別段なりとて我分取し百兩を二ッふなして金藏と才助とゐ廿五兩宛を與へ己れゝ五百兩の内僅五十兩を取置しゝ盜み物とゝ云ひ乍ら欲を放れし仕業なりけり

○幸藏次郎吉と改名の事

并ゐ先の半次圓覺寺の繁昌を告る事

斯て其日の夕方ふ三右衛門ゝ幸藏と打連立て天滿なる近江屋方へと急ぎ行き先淀辰ふ對面して三右衛門ゝ花又の仔細よりして五百兩の金の割符を告知せ金百兩を渡しけれゞ此方も幸藏ゞ氣性を愛め然ゞと其意ゐ打任せ禮を述つゝ請取て又返禮の仕樣も有んと其夜ゝ二人と厚く饗應し扨淀辰ゝ手下の者へ幸藏よりの斷を告るふ翌日よりゝ二三人と限りとなして近付に幸藏ゞ座敷へ入來るふ儼然氣なる武士もあれゞ泰和なる町人風もあり又ゝ殊勝氣の

出家も來る寄席出稼の諸藝人抔如何なる人ゞ目を付るも盜みを働らく者共とゝ思ひも寄らぬ人々ゞ其名を告て叮嚀ゝ土產金の禮を述るゝ幸藏大いゝ淀辰ゞ遠慮のはをを感ずる中ゝも是でゝ上の役人の目を盜むも尤もなりと思ふゝつけても淀辰と三右衞門等ゞ賊あして義心の厚きを稱したり扨又獨り思ふ樣我父母の恩を忘れ遠く古鄕を離れ來て不義の業をゞなしなゞち父母ゝ名付られたりし幸藏と呼ぶゝ勿休なけれゞ切てゝ名なと改めんと或日淀辰ゝ打對ひ探て三右衞門と兄弟分の義を結びたる事なれゞ彼ゞ弟となるを以て次郎吉と呼替へんと言ふを淀辰打笑つてゝ主ゞずゝ三右衞門の遙ゝ上ゝある事なり何ぞ自身ゞ年を以て卑下する事のあるべきやと言へゞ幸藏ゝ聞入ず次郎吉と名を改めぬ扨鼠小僧次郎吉ゝ淀辰ゞ受人と成て長町ゝ世帶を設け表向ゝ博奕打の附合をし內証ゝ夜毎ゝ大家へ忍び入て多くの金銀を盜み取りそれを博奕場へ蒔散し又ゝ新町の遊女屋ゝ現を拔して金錢を湯水の如く遣ひゝすれゞ又貧苦の者と見れゞ身分ゝ應じて與へたり然れゞ平常衾を褸して少しも其名を知らせざれゞ貧人共ゝ何れも皆其何者なるやを知らゞ且又人の疑ひを避んゞ爲ゝ博奕場ゝて二三十兩も勝時ゝ今日ゝ百兩儲けしと言ひ五六十兩も負る時ゝ十五六兩負たりと恒ゝ僞り言ひ置くゆゑ誰も次郎吉ゞ金錢ゝ不自由なきを疑ゝず只々博奕の上手なる若者なりと評判能く三年餘りも暮したれゞ絕て惡事を知る者なりき扨次郎吉ゝ盜みゝもれゞも中人以下の家へゝ這入ず且又大家たりとても陰德をなし善根を施す家ゝ都て除き假令無慈悲の家なりとも二度盜んゝ不便なりと思ひし故ゝ大坂ゝて目を懸し家ゝ大方ゝ這入雖して此頃ゝ少し金ゝ差支へしより能き相談ゝ有んうと淀辰方へ到りしゝ幸ひ三右衞門も來合せて三人一座の酒盛ゝうち寬いで話して居し時會釋をなして入來るゝ此淀辰の手下なるゝ先の半次と云ふものなるゞ聲を密めて言けるゝ親分島渡聞給ひ私ゞ先頃京都へ出て處々を遊んで居た處餘り噂ゞ高い故見物ゞてち尋ね行しゝ二里半許りの在所ゝて字を十生目といへるゝ無明山圓覺寺と言ふ山寺あり今の住寺ゝ今釋迦と言ふ又生佛と言ふ言觸して其隣村ゝ中ゝ及ゞず五里十里の道を厭ゝず加持祈禱を願ふ者實ゝ夥多しく有て大繁昌の儲利益ゝ盲目も目ゞ明き膀行も立など針程の事を棒程ゝ言て投出す賽錢ゝ塵も積つて山寺の山なす許りの容子ゆゑ邊りの出茶屋で仔細と聞しゝ今の住寺ゝ四五年以前雲水の僧で何處からか此山寺へ來しものゝて逗留中ゝ先住の和尙ゞくれ〳〵の遺言とて自分ゞ忽地跡へ直り夫より後ゝ一概ゝ不思議の利益著るく人の信仰次第ゝ增て今でゝ大壯富貴を爲し噂ゝ由れゞ三千兩も金を貯へ居るとの事殊ゝ住持ゝ大力ゝて彼古しへの辨慶とも言ふべき程の者なりと茶屋の主人の物語りまさう嘘つく亭主と見えねゞ疾く親分ゝ告んものと急いで只今歸りし處と言ふゝ淀辰二人ゝ向ひ此頃ゝ味い仕事もなき折なるゝ幸ひ半次ゞ聞込し彼山寺の寶主坊主其奴を欺き有金を取んゝ如何と言詞ゝ三右衞門ゝ思案をなし私も隙々其噂ゝ聞及んでも居る事ゝて今半次ゞ言ひし如く富有の寺ゝ相違なりちん然れども大力ありとの事ゆゑ此方も心搘へなくてゝ毛を吹き疵を求めると言ふ諺ゝ落んも知れず能々手段を巡らされよと言へゞ次郎吉打笑ひ兄貴ゝ分別餘りゝ過ぬ是より連立彼處へ參り三人寄て文珠の智惠手段ゝ其時幾許も有べし然ゝ非ずや親分と言ふゝ淀辰打點頭虎穴ゝ入らざれゞ虎の子ゝ得難し兎も角も今宵夜船で伏見へ行き緩り相談せんといへゞ三右衞門も其意ゝ任ゝ先の半次を供として四人連立旅支度笠の小笠ゝ脚半草鞋何れも腰ゝ帶之の一刀日脚も長き水無月の暑さ烈しき下旬船場を指て出行ぬ

○三賊十生目村ゝ到る事

并三太郎後家物語りの事

鼠小僧ゝ淀辰等と俱ゝ夜船ゝ打乘て其次の朝伏見ゝ着朝の支度を調へて夫より京の片邊の彼十生目をさして行き

其日の夜頃その里の山寺近くへ到しよ以前ハ邊鄙の土地ゆして酒食の店も無りしを先頃よりして圓覺寺の加持や祈禱のゆ利益よ諸人の參詣夥多しく爰や後處よさま〳〵の物賣店も數多出來て今ハ大方の驛路よりハ賑はしゝりき有樣よ次郎吉等ハ感心して或る酒店よ入り酒宴をなしつゝ淀辰ハ二人よ向ひ兎も角も寺ゆ到りて如何なる樣子ゝ見ての後罰ちひ呉んと囁けゞ他の兩人も然るべしと半次を酒店よ待せ置き是より三人ハ爪上りゆ二町ゆまりも登けれゞ小さと茅葺の門の柱ゆ圓覺寺と記しゆり門を潛つて内よ入れゞ其正面ハ本堂ゆてゆ祈禱申の刻限りと書記したる札有よゞ參詣人ハ我勝ゆ前へ〳〵と詰懸るを世話人なるゆや古麻たる袴を着し二三人ゞ其人々を制しつゝ順番よ出給へと只さへ熱き極暑なるよ群集の人よ蒸立ち れ老若男女押合へしゆひ格子も倒さん勢ひよ世話人共ハ呆れ果て途方ゆ暮るもいと可笑く加持する僧を遙よ見るゆ年齡六十有餘よて頬骨顯ハれ白き髭ハ長く胸の邊りゆ垂れ身ゆハ金襴の袈裟衣を殊勝らしく着用し結加跏座して我前ゆハ經机など飾り立て口よ何やら唱へつゝ加持祈禱とゞ悦けるよ田夫村婆ハ何れも皆隨喜の涙よ袖を濡せり淀辰等ハこれを見て彼ハ正敷狐遣ひゝ左なくゞ山師ゝ兎も角も正しき出家でハならふと囁きながら猶も又群集よ紛れ入込て住持ゞ居間抔見定め暫き再び半次を待せ置し酒店ゆ到りて淀辰ゞ主人を呼びて言よ樣ハ今日ハ取譯參詣人の多き譯よや何時迄待ゞ祈加持を受る事もおらず併し翌日出直さんも誠よ難儀の事なるゞ爰等邊りゆ何處なりと宿貸家ハあるまいりと問へる詞ゆ主人ハ思案し去ゞ此地ハ寺の陰で漸々此頃開けまして斯ハ賑ひまもものゝ未だ旅籠屋までハ出來ませぬゞ是より四五町參られると三太郎後家とて六十近き一人の婆ゞ住む家ハ以前相應の暮しよて住居もなり〳〵手廣のもの今でハ外ゆ便るべき者さへもなき獨身よて其日暮しも漸やくなれゞ見苦しきさへ拵ひなくゞ元心宜婆ゆゆゆ頼みを否とハ

ヤまい兎よ角行て伺覽なさへと云よ皆々打悦び酒酌替して顔を集め密談數刻よ及びしよ今夏の日の長きさへ早暮近く成たりき四人ハ食事も十分濟せて酒食の代の其外ゆ茶代をはづみ立出れゞ茶屋の亭主ハ宵闇の足元照す小提灯金の光りよ浮雲なく先立送て彼婆ゞ早くも門よ到りしりゞ此處ゆて主人を勞ちへ歸し次郎吉ハ先へ行き頼んで來んと皆々を門の處へ待せ置き本家よ入て見し處壓々ハ蚊燻しゆし乍ら頼りよ糸を取て居たるゆ次郎吉ハ小腰を屈めて若伺婆さんゆ無心乍ら道に迷ひし旅の者連の者ゞ底豆を煩らひし跡故ゆつひ此日の長いのよ歩く道さへ捗どらず最う京都へ行馬駕籠もないとの事伺見請ヤて伺願ひなるゞ何んな處でも能い程よ今夜一夜伺厄介ゆ此方へ泊めてハ下さらぬりと云ふよ婆ハ糸車の手を止めて此方へ見遣り夫ハ嘖々伺困りおらん見らるゝ通り家の中ハ廣けれども壁も落て壁もあらず其上ゆ蚊蚊と防ぐ蚊帳さへなし然し夫を承知なら遠慮ハ入ぬ此破家幾人なりとも泊られよと言よ次郎吉打悦び然樣なら伺厚ひヤと表へ出て淀辰よ云々と囁くよ皆々も承知して内へ入婆々よ厚く禮を述れゞ老婆ハ圓燈裏よ掛し土瓶の湯と茶碗二ッを四人の客よ饗應たり四人ハ家の貧さを互ひよ不便と思ひつゝ淀辰婆々よ打向ひ私し共ハ今そこで飯も酒も十分ゆ遣つて來たれゞ決して御ハずよ仕事をなさるゞ能い夫に付ても見受し處以前ハ何の何某とり由緒有氣の此住居夜なべ仕事の片手業身の上咄しを聞されよと云へゞ老婆ハ泪を流して氷の流と人の行末いつて返らぬ事柄を伺咄しヤも泪の糧元私しハ此土地の者ならず生れ古郷ハ江戸なれども若氣のついした誤りゆ男と二人亡命して大坂の地ゆ暮て居しゞ其男ハ流行病の數ゆ入値よ煩ひ死しける故今更何と詮方なく江戸へ歸らんゆも二親ハ幼き時よ死果て頼みとするハ兄許り然れども夫さへ死絶しと風の便りゆ聞し故他人の世話で漸々と料理屋の酌女ゆ雇れ居りしよ此家の主人三太郎殿ゞ大坂へ來られし時酒の相手

よ呼れしゞ縁となり此家の女房となつて間もなく男の子を儲け名を三吉と呼なして寵愛せしゞ三吉も成長よ隨ひ酒を好み遊女通ひの放埒より早晩博奕打の仲間へ入親仁殿ハ此村ゐて代々名主もする家なるゐ三尺帶よ長脇差自慢貞よて押歩行を種々異見なしたるゐ彼ゞ甘才の其時よ親をゞ捨て置手紙江戸へ行とて家出せしゞ其後ハ風の便りもなく憎い奴とハ思へども懸替の無き一人子故今日ハ歸るゝ翌ハ又便りゞあるゝと夫のみを樂しみ暮す憂月日昔しの我身を思ハれて親よ等しき一人の兄よ苦勞を懸し私しゞ因果い巡る我子の三吉斯迄親を歎ゝせなゞ又彼ゞ身ゐも報ハんゝと末の末迄子を思ふ親の心の遣方なく其憂中よ五年以前此村の頼み寺なる圓覺寺の住持ゞ死なれて終ゐ雲水の旅僧ゞ遺言なりと云ひなして後の住持と成しより今迄ハ去る事もせざりし加持祈禱をなし所々の人を集るを三太郎殿ゞ兎や角言ふて止めしゞ其罪を佛の憎ませ給ひしと今だよ人々罵ると聞私しの胸苦しさ其年極月の事なるゞ此家へ盜人忍び入三太郎殿を切殺し有金殘らず奪ひたり夫より後ハ此婆一人仕樣摸樣も泣ゞゝり寄る年故ゐ田畑の業も出來兼れゞ只有ものを賣喰して漸々今日迄生甲斐無命を繋き居ゞもるゞ行衛知れざる三吉ゞ再び歸り來るゝと夫のみ日毎よ待まする斯身の恥を悔咄しゆも若其悴三吉ゐ逢ひ給ふ事の有もせゞ婆ゞ疑義の今の身の上知らせてゐ貰ひゆたさとハ云へ雲を掴むとゝ云ふ當ゐハならぬ事乍ら悔深切の悔辱ゐ甘いてゆ慨悔咄し居溜き婆なりと笑ひ給ひそ旦那方と泪乍らよ物語りぬ

○三賊圓覺寺へ忍び入事
幷住持を生捕事

扨も老婆ゞ身の上咄しよ就れも不便と思ふ中ゐも次郎吉ハ心の中我身も矢張彼三吉と同じやうよ親を捨て遠き他國よ三年餘り江戸ゐ居らるゝ勘達ハ今此婆の如くゐて嘸や歎いて居られんと身よつまされて自ゝら頻りよ古郷の懐ゝしく今宵の仕事を思ゝりとして最早江戸へ出立せんと思案しゞゝら淀辰等と俱々老婆を慰めつゝ奥の一室を借受て蚊燭しの灯を燈火ゐ代へ何れも時刻を待内ゐ老婆も最早寢たる樣子次第よ更る異夜中の丑滿頃よ成ければ時分ハ良と半次郎を其家へ殘して三人連立見定め置し圓覺寺へ到るや否や淀辰ゞ先へ立て本堂へ其手を闕して差招けゞ得たる奇術の不思議ゐ自然と入口の戸ハ開たり三人其處より忍び入俱ゐ住持の居間よ到り有明の燈火を搖立て釣たる蚊帳を三右衛門ゞ切落して和尚起よと呼ハる聲と諸共に次郎吉ハ用意の細引取出し蚊帳より出るを戒しめんと待折しもぬくゝと逼出るハ住持ならぬ五十許りの老父なり三人ハ良見合せ是ハと許り惘れしゞ淀辰ハ老夫ゐ向ひ汝ハ何者ゞ住持ハ何方よ有ゞ僞らず告よと言ふよ老父ハ三人の樣子と見て何れも盜賊と見て打震き聲を震ハして我ハ當寺の下男與助と言ふ者和尚樣ハ毎も夜分ハ居りませぬ留ゞハ我等ゞ獨り寢の寺ハ明店同樣よてほんの佛の造作許り禪宗ならねゞ無一物盜人さんならぬ氣の毒と斷り言ふを淀辰ゞ是親仁手前も此寺の下男と言ふゝらハ豈夫住持ゞ居處と貯へ金の有處を知らぬと目ふ事これ有まじ若言ぬならゞ言して見樣と腰の一刀拔放し目先へずつと指付れゞ下男ハ顏色青染てマア〳〵待て下されまし是許りハ和尚樣より厳々堅く口止され何な人ゞ尋ても云ふてハならぬと云ハれたれども命ゐ替る寶ハない寶ハ此本堂の後ゐ別間ゞ有て其所ゐ旦那ハ居らるゝなり併し其座敷へハ外より道入所なし此壁の下を明けて見られよ座敷へ通ふ抜道あり斯許り教へし上ゝらハ我等ゞ命ハ此まゝゐ何卒惰よ助け玉へ南無阿彌陀佛と伏拜むよ不審乍らも次郎吉ゞ壁を一枚押明て下なる板を取除るよ中ハ分ちぬ眞暗黑手を挿述て探り見れゞ其處よ階子を懸てあり次郎吉先へ入んとするを淀辰ゞ押止め私ゞ先へ見て來やうと階子を下りて行程ゐ僅六尺許りゐして又横の方へ行く道あり其道六尺許りを行けゞ又横よ道あり又々其所を行よ三間餘りゐして突當り又上り口あり其階子を

上つて見るゝ六疊許りなる綺麗の座敷ゐ蚊帳を釣て行燈の側ゝ酒肴抔取散し蚊屋の中ゝ蓋間見覺えし老僧ゞ年若き女子二人を左右ゝ寢させ酒に甚く醉しと見へて高鼾ゐ眠り居たり扨ゝ此坊主も矢張賊の仲間なるゝ今斯の如く寢たる處ゝ我一人ゐても縛しめらるれゞ斯てゝ兩人ゞ本意なく思ゝん先々兩人を呼來らんと彼階子を下りんとする時和尚早くも目を覺し蚊屋の中より覗き見るゐ一刀帶せし曲者ゞ階子を下りんとするさまゝ驚きたれゞも年經し曲者盜賊待と言ひながら蚊帳を刎除突然と淀辰ゞ帶引捕へ捻伏んとする勢ひゝ淀辰横ゐ身を捻り其手を取て捻上んと擬みゝゝりゝせしゝゞも年ゝ似合ぬ和尚の大力淀辰元來然者なれゞ終に組伏られたりける其時和尚ゝ女を起して細引を持來よと言ふゝ女ゝ震ひ乍ら戸棚より細引出して和尚ゝ渡せゞ住持ゝ夫を受取んと左りの手を出すと俱ゝ間を見遣る其折しも穴蔵の中より踊り出たる次郎吉ゞ和尚の肩ゝ手を懸てやつと仰向ゐ引倒すを淀辰得

たりと刎返し今ゝ三人上を下へと組合ふ折柄三右衛門も早く此場へ走來り俱ゝ力を添し程ゝ流石ゝ和尚も縛しめられしゝ切齒をなして目と見張こゝな小盜人共汝等如きゝ縛しめられる我ならねゞも昨夜ゝ酒を過せし故不意を許られ此不覺率速ゝゐ繩を解左なくゞ蹴殺し呉るゝゞと息急荒く匐りしゝ實ゝ凄ひき勢ひなりし

○鼠小僧天井働きの事

井三賊穴熊ゞ金を奪ひ去事

俚諺ゝ毒を以て毒を制すと今惡僧ゞ三人を口を極めて罵るを此方の三人ゝ笑ひ居しゞ淀辰覺ゝ聲を勵まし此賣僧汝先空言を止めて命ゞ惜くゞ今迄諸人を欺きて貪りし金を疾く出せサア其有所を白狀せよと云へゞ和尚ゝ聲を荒らげ汝等如き小盜人ゝ我名を語るも殘念乍ら今宵の仕義ゐ是非なくも盲ひ聞す間能く聞き以來ゝ此身の手下とあれ我ゝ北國ゐ隱れなき穴熊大太郎といふ强盜なり汝等如きゞ迫れゞとて爭ゝ金の有所を知らせん夫より早く頭

を下て報謝を願ハゞ百や二百ゝ呉ても遣ふと云る詞を打消しながら淀辰ゞ業突ばりの欲張坊主め云ずゞ云なと腰刀拔より早く首打落し傍なる二人の女ゝ向ひ汝等ゝ何者ぞと問ゝ女ゝ慓いて恰も面色土の如く聲も出兼しゞ一人の女云ふ樣私しゝ京都の嶋原に近き藝子の龜と申者是なるゝ同業の花と申者なるゞ此月始めゝ二人して相談し互ひゐ持病の癪ゞ强き故人の噂ゐ聞及びし圓覺寺樣ゝ何樣の難病ゐても淨加持で愈すと言ふ事故何卒愈して頂き度と漸々暇を貰ひ駕籠ゝ乘て此寺へ參りしゐ其日ゝ生憎休みと申事ゝて淨瑠璃ありしより力も氣も拔て歸らふとせしゐ此寺の與助とやちゞ呼止めて和尚樣ゞ言るゝゝゝ折角京都より態々來りし者を無下ゝ歸さんも氣の毒なれゞ連て來いと仰やるゆゑ一所ゝ來よと連られしを偽りとゝ露しらず其詞ゝ任せし處一人宛此慰れ座敷へ押込られ否應なしの無理往生憂き月日を半月許り地獄の責も是程の苦しき事ゝ有まじと泣てゞつゝり居りましたを今晩貴方樣方ゞ淨出ありしゝ誠ゝ幸ひ何卒淨慈悲ゝ二人ゞ命淨助け下されて此寺を逃して下され拜みますと年增の龜ゞ言

ふ尾ふ付てお花もとも〻手を合して頼む詞のいぢらしさ
ふ淀辰ハ打點頭ひ前達ふハ罪ハなし命取らぬハ勿論なれ
ども此悪僧ゞ貯へ置し金の有所ハ何處なるゝ定めし知て
居るだらふ夫を包まず知らせよと云ふゐ二人ハ居撰る行
燈ふ指さして是の上にと言ふ側より次郎吉私ゞ見ませう
と云ひつゝ其身を閃めゝし件の行燈と踏臺として天井へ
と手を懸るゞ否や板を一枚押明て天井裏へ這上り中を尋
る形勢を藝子二人ハ云ふも更なり淀辰三右衛門も惘るゝ
許り其身の誠ふ輕くして自由自在なる働きふ舌をゞ巻て
感じける偖次郎吉ハ天井の中を那處此處と探りつゝ文庫
三ッ四ッ取出し手渡しするを三右衛門ハ下ふて是を請取
ふ跡ハ蜘の網をつゝりだと戯れ乍ら次郎吉ハ足と放すと
見えたるゞ飄然と下へと飛おりけれゞ兩人ハ是を勞ひ
つゝ終ふ三人一致して麻風呂敷の大なるふ文庫の金を打
明けて其儘聯と包みけれゞ此度ハ私ゞ荷物持親分先へ行
あさへと三右衛門ゞ金包を肩ゐ引懸立上れゞ淀辰ハ先ふ
立又次郎吉ハ跡ふ添ひ二人の女子を誘ひて元の座敷に立
出るお前次郎吉三右衛門ゞ彼抜穴へ這入し時下男の與
助を聯りと柱ふ縛り置しゝゞ動きもやらず眼許り光らし
乱視〻して居る有樣を見て三人ハ打笑ひ見向もせずゐ
門へ出れゞ半次ハ其處ゐ待詫て親分餘りふ遅い故先刻ふ
り待て居ました首尾ハ如何と尋るを夫ハ固より上々吉夫
ハさうと宿を借た老婆ふ幾許ゝ遣たゝと云へるを待ず次
郎吉ゞ夫ハ先刻私ゞ出懸ふ居燈裏の側へ小遣の餘りゞ四
五兩有た故駄手を付て置て來たゞ又此後幾許でも持して
遣たゞ宜らふと云ふゐ淀辰三右衛門も行届きたる次郎吉
ゞ取扱ひを感じつゝ夫より半道程行しふ早夜も明近くゐ
りしふ此處ふて淀辰以下三人ハ二人の藝子と道引遂へ
大坂指て立歸りぬ

鼠小僧實記上卷畢

明治十八年二月廿七日御届　定價一冊金二十錢

編輯人不詳　東京深川區富岡門前東仲町十六番地
出版人　東京府平民　廣岡幸助
發兌印行　東京京橋區三十間堀二丁目一番地　榮泉社
社主　山内文三郎

廣告

○今古實錄　大岡仁政錄

○村井長庵記　上下　二冊　定價金四十錢
○越後傳吉傳　上下　二冊　同　金四十錢
○畔倉重四郎記　上下　二冊　同　金四十錢
○松田阿花傳　上下　二冊　同　金四十錢
○小間物屋彦兵衛傳　全　一冊　同　金二十錢
○白子屋阿熊記　全　一冊　同　金二十錢
○鈴川源十郎記　上中下　三冊　同　金六十錢
○水呑村九助傳　上下　二冊　同　金四十錢
○鯨論裁許卷　全　一冊　同　金二十錢
○雲切仁左衛門記　全　一冊　同　金二十錢
○安間小金次傳　全　一冊　同　金二十錢
○後藤半四郎傳　上中下　三冊　同　金六十錢
○花咲屋藤作傳　四冊　同　金八十錢
○さられ與三郎記　上下　二冊　同　金四十錢

右の史とも世ふ有名なる大岡越前守忠相殿勤役中數多裁許の中最も面白き事人意の外ゐ出し明斷を書つゞりて勸善懲悪を明了ふしゝゞ婦女子方の淫心得ふも成べき冊紙なれゞ何卒淫愛看あらん事を希ふ

○護國ゞ太平記　上下　二冊　定價金四十錢

徳川五代の大將軍綱吉公將軍職ゐ補せられ給はぬ前未だ右馬頭と申館林宰相と号し奉つりし頃其臣下に柳澤彌太郎と云る人あり天性怜悧ゐして能く公の意を迎へ始百五十石の小身より遂ゐ天下の諸侯ゐ列せられ百万石の淫墨附をさへ得るに至る古今例なき榮を取し事未代の今日まで能く人の知る處ゐて此事近來演劇ゐものし舌耕師ゞ張扇の音高く辨ずるも皆實説と徑定せり此女太平記ハ別て實中の實説ゐして賢女劔を鋒して國を護るの万々歳まで委しく説明せし又今古ゐ多く見ざる面白き珍書なり何卒淫高覽の程を望ふ

○今古實錄　大久保武藏鐙　全部八冊續切　定價金一圓六十錢

此双紙ハ弊社ゐ於て追々發兌せし○松前屋五郎兵衛之傳(二冊)宇都宮騒動之記(三冊)彦左衛門功績之記(三冊)合て八冊を以て同氏忠敬殿の勳功を漏なく記載せし面白き書にして今般大尾ふて全く發兌しまゝ四方の諸彦淫愛覽あらん事を希ふ

東京圖書館

和書門	類	一函	八架	九八號	三冊